

です、其一例を話しますれば、昔し中村富十郎が能役者から能の振を教はつて、「道成寺」に振付をしたとき、戀の手習に「末はさうぢやにな、さうなる迄は」とある所に至つて確と當惑しました、何う振を付けて善いやら色々勘考したけれども、是れはと思ふ好思案も出ず、倦み果たる末、時の人形使ひ陸奥彈正の處へ参りまして相談をしますと、彈正は何故か聞いて聞かない振をして、折角相談しても話頭を横道へ持つて行きますから、止むを得ず其處を辭して玄關へ出ました、すると此處まで見送つて來た彈正は、不圖富十郎を

呼止めて「さう互に斯うなつては終ひぢやな」と、腰を屈めて杖を突く眞似をして笑ひました、富十郎は之を見て「ア一成程」さうぢやにな、さうなるまで」は互に海老腰となるまでと云ふ事にしたら善からうと、初めて心付きまして、夫から宅に歸つて直にこの振を付けて、暫時の間は其儘歸つて居りました、然るに千女路幸は斯る大振袖の娘が、杖を突いて老人の眞似をするのは如何にも不似合だ、何とか旨い工風はあるまいかと種々考へた末、遂に只今も廣く用ひられて居る振、即ち左右の小指を結んで袖にて顔を掩ひ、

如何にも嬌羞の様を顯はす事になつたのであります、扱斯う仕上げて見れば何でもない様ですが、之を仕上げる迄の苦勞は並大抵ではありませぬ。

藩輔の最初の振付

又櫻田治助が書いた狂言の中に、三月のお花見に乞食が腰付馬(昔し流行た腰へ付ける張子馬)に乗つて飴賣になつて出ると云ふ處があります、夫を成駒屋(先代の歌右衛門)が演じましたが、其文句の中に「敵驢に乗つてエイ〜谷の向ふは花盛りコイツは妙だ〜」と云ふ句があります、一向解らない、敵驢に乗るとあるから是れは何

でも故事のある事に相違なからうと思ひまして、或る博識の所へ往つて尋ねますと、其人も解らない、そこで此狂言は三月の御花見に乞食が腰付馬に乗つて飴賣に出ると云ふ仕組でありますと申しましたら、博識家は成程左様かと手を拍つて、夫は漢の玄徳が敵の馬に乗つて谷を飛下ると、其處は牡丹の今を盛りと咲き亂れて、眞に景色の善い所であつたと云ふ故事を引いたのであると教はりました、夫で其様に振を付けたともあります。

師匠から叱られる
又私しは藝道のことと師匠から叱られ

たことがありますが、夫は故城東龜造がまだ彦三郎と名乗て居ました時分のこと、其時の鶴之助(後竹三郎と改め更に二代目彦三郎となる)と共に角兵衛獅子を演ずるとき、鶴之助が角兵衛獅子となり、彦三郎が大鼓打となり、私が之れに振を付けました、其時私の師匠の西川扇造は病身で病牀の内から見て居りましたが、所作に大鼓打の彦三郎が角兵衛獅子の鶴之助の草鞋の紐を結ぶ振をする所がありました、すると、師匠は病牀の内から私を叱付けて申しますには、角兵衛獅子が草鞋を穿くか、道を歩く時にも些と注意をせ

よ、角兵衛獅子の穿物は下駄と相堪が定まつて居る、偶には雪駄、草履などを穿くこともあるが夫は至つて稀れなことで、草鞋などは決して穿かないものだ、總じて振付をするものは一事一物疎かに見過しては行かん、琵琶湯賣を見よ、必ず荷の傍に下駄を吊下げて居る(昔し琵琶湯とて飴湯の如く行商する者あり、荷を卸したる傍は客の吞捨てたる湯にて水溜りのやうになり、草履にては歩くこと能はざれば、琵琶湯賣は荷に吊下げたる下駄を穿きて、此水溜の中を通行し、扱乾きたる所に至れば復下駄と草履と穿替へるなり)

注意すべき事なりと教へられました、私は成程と感心して其後は師匠の言葉を用ひ、道行く折にも氣を止めて萬事に注意をしました。

カツボレの初まり

それから私の三十七八の頃、即ち今より四十年前程前一夜或る客と一緒に或る所へ遊びに参りました、その年は其所に初めてカツボレの来た年で、私の客が其カツボレを呼んで踊らせました、客は實に面白い、ホイッは何でも役者に演らせたら好からうと思ひまして、師匠の後今の芝翫と菊五郎の兩人に相談して中村座で踊らせました、そ

の以前私は彼のカツボレを宅に聘んで、この舞臺(壽助宅座敷の舞臺)に踊らせて其振を見ましたが、其時彼等は斯う云ふ舞臺に上つて踊つた事がなから、足が滑つて踊れぬと云ふので、更に庭に下りて草履を穿て踊りました、此振を前の二人に振付して、中村座で演じますと、案の如く大當りを取りまして、夫からと云ふものは藝者が之を真似て、御坐敷へ出てカツボレを踊る、客も目新しいから所望すると云ふ鹽梅で、乍ち世上に擴まりました、一寸しでも左様云ふ様な者で、振付師と云ふものは中々注意が專一であります。

併し昔と今と較べて見ますと、只今は踊を見分けて上手を貸めて下さる御客が趣いやうに見えます、昔は町に藝者がありましたにも拘はらず、諸大名方には各々狂言師と云ふて、女衆が立派に扶持を貰つて抱へられて居ました、御酒宴などの席には必ず此狂言師が出て踊を踊る、夫が商賈でござりました、随つて諸大名方も眺めて華美を誇られたものですが、只今では世も開けて何方でも御酒宴の際には藝者を呼びに成りますから、別に邸に抱へて置と云ふ様な事もございませぬ、それ故昔の

様にサエにも儀様の方の御藝古をなさるより藝者衆の藝古をする者の方が多い勿論夫も二三年此方ではあります、此二三年此方藝者衆の殖えたことは夥しい數で、猫も拘子も踊出しましたが、扱斯うなると踊の師匠が乏しくなりました、先づ振付の元祖とも云ふべき初代藤間勘兵衛時代には、中村傳次郎、同彌八の兄弟、外に西川仙造（此仙造は人形遣ひより出たる者にして、三代目に至りて岩井半四郎と縁組の事あり、之より仙を改めて扇とす）などがあり、四代目扇造時代には藤間大助、藤間勘十郎、市山七十郎、松本五郎一など

どがあつて中々盛でありました、然るに是等の人は多く中絶して、只今では六代目の藤間勘右衛門がある許です、勿論此人も正統ではない、先代の勘兵衛は八丁堀に住んで居た時分故ありて伊豫の今治に参りまして、其所で死亡致しましたから、其弟子なる今の勘右衛門が跡を取つて居るので、西川扇造も五代目に断絶致しました、花柳は私しが初代であります元と私は五代目扇造の弟子でありましたが、扇造死去の後相弟子の隠跡によりて、其未亡人から破門をされましたので、丁度私しの二十四五歳の時でした、夫から私し

は止むを得ず別に一派を起す事に決心して遂に只今の花柳を起したのであります、それ故只今では振付と云へば先づ藤間と私しの二人があるのみとなりました。

今の上手

只今踊を善くする人は俳優では市川團十郎、尾上菊五郎、中村芝翫、澤村訥升などで子役では丑之助、團子などは後來頗る望みのある方です、又素人では上野八百膳の娘カメ（時藏の女房）、猿之助の女房ユト同じく妹スマなどは先づ上手の部であります。

門始めて續狂言引幕大道具を工夫し、又女形を始めしといふ、文化十三年迄十一の間、市村羽左衛門相續し、同年三月より桐座と改め、桐長桐座元となる、同十四年十一月より都座と改め、都傳内座元となる、文政元年十一月より玉川座と改め、玉川彦十郎座元となる、同十四年再び市村座と改め、十五代目市村羽左衛門座元となる、天保十二年類焼、同十三年淺草山の宿に移り安政元年及び翌二年の二度の類焼、明治五年四月中村山座と改め、村山又三郎座元となる、同七年宮本座と改め、宮本善三郎座元となる、同八年十二月薩摩座と改め、大薩摩吉右衛門座元と

なる、同月類焼、同十年四月中村座と改め、濱田兼太郎座元となる、同十一年七月八日青柳房吉座元となる、後見中村善四郎(藝名市村辨藏)劇場を建築す、村山又三郎より是に至る二十二代二百六十四年なり、後火災に罹り下谷區二長町一番地に移轉す、今の市村座即ち是なり、座の總坪數四百五十坪にして、機數三百人土間千二百五人、大入場三百九十三人、立見場三百十八人を入る
新富座 萬治三年木挽町五丁目太郎兵衛なる者、同所に歌舞伎座設立を願出で、寛文元年前肥桑原十郎の後裔桐大藏座(相州小田原在萩窪にあり、後北條の時

代より壘付を得て興行したるもの)の桐尾上を招き、女芝居を開場す、既にして俳優坂東又九郎の次男又七を養子として森田勘彌と改めしめ、其後森田座と改めて森田勘彌その座元となる。文化元年河原崎座と改め河原崎權之助座元となる、此間兩度類焼に遭ふ、天保十三年中村座市村座と共に淺草山の宿に移され、猿若町三丁目に座を建てしが、安政元年元治元年の二度火災に罹る、後森田家坂東三津五郎より河原崎權之助に掛り、座元名義取戻を出願し、首尾よく勝利となりて森田座の名を恢復し、三津五郎更に森田勘彌と名乗て座元となる、其頃市村座の

座附相中俳優なりし中村勘左衛門帳元となる、其子に次三郎といふ者あり、勘彌に養はれて座元を相續す、即ち故守田勘彌なり、明治五年新富町六丁目へ轉座の許可を得て、同八月建築、同八年九月新富座と改めしか、同十年二月類焼、同十三年十一月十五日同座に新富演劇會社を設立せしも、同十五年解散、同十六年勘彌の弟長太郎の男大宮豊三郎座元となり、後ち勘彌又出でて座元となりしか、二十四年退隱の後、新富座は桐座となり、深野座となり、又新富座となり、都座となり、昨三十年七月又新富座の名に復す、萬治三年の創業より是に至るに二百四十

年、總坪數四百十八坪四合にして、棧敷には二百八十五人、土間千三十九人、大入場三百四十七人、立見場二百九十四人を入るべし。

春木座 本郷區春木町三丁目の地主奥田富藏の子、味噌問屋奥田登一郎なるもの、明治四年中春木町一丁目の所有地に劇場新設を願ひ、同六年五月中認可せられたるを以て、猿若町森田座を買入れて建築し、奥田座と稱して同年七月十二日開場、九年二月奥田利兵衛座元となり、十年一月中春木座と改稱して深江庄兵衛其座元となりしが、同年十二月奥田より座元名義取戻しを願ひたる結果、奥田座

に復し、同十一年六月奥田登一郎再び座元に復す、最初より是に至る二十七年間、中劇場として許可せられしが、二十三年大劇場に改築す、其總坪數四百七十四坪一合六勺三才にして、棧敷二百七十一人、土間八百五十一人、大入場八百六十八人、立見場五百十三人なり。(但同三十一年三月廿三日焚焼失)
千歳座(現今の明治座) 千歳座は舊幕の頃、西兩國廣小路にあり、藤張の小屋なりしを以て、雨中には興行し難く、又將軍家大川筋御成の節は取拂ひを命せられ、俗に青天小屋と呼ばれたりしが、明治五年中永久の取拂ひを達せられたれば、同六年四月二十八日日本橋區久松町

三十七番地に新築して喜昇座と稱し、鈴木吉兵衛高木秀吉(大工)高濱散助(士族)の三名其座元たりしが、間もなく鈴木は退隠して、高木高濱の兩名にて小芝居を興行し、十二年六月久松座と改め、同時に建築を改良せり、同年八月廿三日より大劇場の部に入りしか、十二年二月類焼の後、暫らく濱町二丁目假小屋を設け、十六年五月迄興行す、同年十二月二十四日元地へ建築の許可を得て千歳座と改稱し、十八年一月四日開場式を行ふ、其間敷間口十八間興行廿七間の土蔵形なりしが、去る二十三年久松町三十七番地へ移轉し、明治座と改稱したり、此總坪數三

百十坪五合にして、棧敷四百二十四人、上土間二百六十六人、下土間四百六十八人、大入場二百二十八人、立見場三百人を入るべし。
中島座(廢座) 中島座は石渡吉藏(薪屋)なるもの、明治四年中迄東兩國にて藤張芝居興行をなしたりしが、同六年四月二十四日日本橋區蠟燭町二丁目開場し、吉藏が上總中島の産なるの故を以て、中島座と稱せしが、今は廢座となる。
榮升座 明治五年中、河原崎權之助、即ち今の市川團十郎河原崎座の再興を志し、自分は市川團十郎と改めて市川家を相續し、其頃市村座仕切場の手代定次郎

の子定吉と云ふを養子となし、河原崎權之助と改めて劇場新築を出願せしに、同六年八月一日許可あり、同七年七月十日芝新堀町一番地に開場す、然るに同十年負債の爲め權之助辭退したるを以て、羽賀茂七なるもの座元となり、新堀座と改めて女歌舞伎を興行し、十一年榮升座と改め、中井弘成座元となりしが、未だ一興行だもなすに及ばずして、家は債主の爲めに取拂はれ、十四年芝明神町(舊森家屋敷内)に轉座を企て、成らず、十七年四月十四日八丁堀北島町十七番地に移轉せしが、今は廢座となりぬ。

桐座(廢座) 桐座は市村座の控櫓の稱なり、(控櫓とは座元負債の爲め本座の名義にて興行をなす能はざる場合に於て、債主の督促を避けんが爲め姑らく他の名義を藉るをいふこと)文化十三年三月より同十四年迄、菅屋町市村座に於て桐長桐座と稱へ、座元市川團之助興行せしが、死亡後一時絶家となり(此間六十七年)明治六年當時桐座の後見内山新造、三代目市川團之助の子市川團彌市川團之助となりて桐屋を再興し、四谷荒木町(舊津頭)の屋敷内に開場す、十五年團之助死去、其母みね座元となりしが、間もなく廢座となる。

澤村田之助の兩名にて、深川區仲町の舊貸座敷假宅跡に劇場設立を出願し、六年六月中官許を受けて辰巳座と稱しが、其實外圍のみにて遂に建築せず、七年五月羽賀茂七單獨の座元となり、九年三月本所線町五丁目卅六番地に移轉し、常盤座と改めて小劇場を開きしが、十年二月更に澤座と改め、三浦小太郎座元となり、十三年七年相生町五丁目に轉座したるも、十七年大風に吹潰され廢座となる。

東座(廢座) 明治三年中大薩摩吉右衛門、神田御成道俗に加賀ッ原にて操釣人形の興行を出願し、官許を受けて建築せしが、同四年中類焼せしより、五年歌舞伎劇場

に改め、六年六月中、京橋區中橋南鞘町に轉座す、同七年五月澤村座と改め、澤村田之助座元となり、八年中三木座と改め、三木庄吉座元となり、同九年二月寶樹座と改め、寶樹又兵衛座元となり、次で同十一年中鈴木長次郎(故森田勘彌の弟)座元となり、新富町三丁目へ轉座の官許を蒙り東座と改めしが、建築するに至らずして廢座となる。

歌舞伎座 去る明治二十一年八月、千葉勝五郎其筋の許可を得て、木挽町五丁目に新築し、翌二十二年十一月落成、歌舞伎座と稱す、規模宏壯市内の各劇場に冠たり、總坪數四百五拾七坪五合にして、棧

敷には四百八十二人、土間千四十二人、大入場三百人、立見場二百四十二人を入るへし、後ち二十九年七月七日、千葉の手を離れて株式会社となる。

川上座 同座は神田區三崎町三丁目に在り、去る明治二十六年中、新俳優川上音次郎之を出願し、同二十八年建築落成す、總坪數二百二十二坪、機數百五十人、土間五百七十七人、大入場三百五十四人を入る但此座に限り立見なし。

東京座 同座は神田區三崎町三丁目に在り、去る明治二十七年六月許可を得て、三十年三月落成、總坪數三百三十四坪九合四勺なり。

以上即ち大劇場七座

歌舞伎座	京橋區木挽町
明治座	日本橋區久松町
市村座	下谷區二長町
新富座	京橋區新富町
春木座	本郷區春木町
川上座	神田區三崎町
東京座	全
に加ふるに、小劇場十二座あり	
宮戸座	淺草千束町
淺草座	淺草新猿屋町
常盤座	淺草公園改築中
眞砂座	日本橋中洲
番座	本所緋町公園建築中

三崎座	神田三崎町
開盛座	淺草七軒町
柳盛座	全向柳原町
榮座	本郷根津
深川座	深川富岡門前仲町
演伎座	赤坂溜池町
四谷座	四谷津の上建築中

小劇場は明治二十三年の劇場取締規則により、廻舞臺及び引幕を許されず、引幕に代ふるに純帳を以てせり、何故に斯る制限を置かれしやといふに、小劇場は元道化師座たりし故なりといふ、此道化師といふは、明治十二年中に始まりしものにて、其頃浮世物真似と唱へ踊手は皆張

子盛に手拭を被り、粗末なる衣裳にて舞臺の道具立もなく、言は、舊幕の頃淺草奥山などにて興行せる物真似、俗に伊賀藏といへるもの、如くに踊りたりしが、翌年より之を道化手踊と言ひ慣し、一幕狂言に限りしを、其後追々芝居の手振に倣ひ、續狂言を仕組みて、登場者も錦織入りの衣裳などひけらかし、座名を自稱し、繪看板を掲ぐるなど、遂に純然たる芝居となりたれども、習慣上之を他の劇場と同列にあく能はずして、扱こそ大小の名を附し、制裁をも加へて、其儘今日に至れるなりとぞ、左れば此規則は營業者に對する公平の道にあらずして、其筋

にても行く／＼改正の目的を立て目下取調中なりといふ。

演劇を見んと欲せば、大劇場は、大抵午前十一時頃開場し、八九時頃閉場し、小劇場は午前八九時開場、五六時閉場なれば、其心得にて出向くべし、劇場には座附茶座あり、以て観客の便を計り、轉旋の勞を取る、茶代は壹圓前後なり、茶屋の手を経て観劇する時には、若衆と稱する茶屋の雇入にも三十錢以上五十錢位の祝儀、即ち世話を與ふべし

茶屋に就かずして木戸より行く者は、茶屋への茶代を除くを得れども、好場所を望むべからず、場代は劇場によりて差違

あれど、土間一間四五圓と思ふべし。

劇場には「か、べ、す」と稱し、幕間に、菓子辨當餅を持ち来る、これ東京人士の習慣なれば、命なくとも持来るなり、尙「か、べ、す」の外に観客の好により、種々の料理を取寄すること自在なり、水菓子あり、氷あり、銘酒あり、珈琲あり、饅頭あり、口取あり、天麩羅あり、刺身あり、意の如く備はる、されど場内賣物は他に比して高價なりと思はざる可らず勘定書の内「小物」とあるは、茶、番附、煙草、盆の代と知るべし、大劇場にては大抵座附茶代として一樹につき五十錢を徴す。

勘定書に「手積料」又は「手詰料」と稱し、

僅少なれども若干金を請求するあり、観劇には土間二三より五六の間を可とす、左右機敷は眞に好劇の人には宜しからず、割込場は多人數割込の場にして、一日間大劇場にて二三十錢の間あり、一幕見は一日間観劇の餘暇なき人、或は安價に観劇せんとする者の、一幕又は二幕と隨意に立見する處なり。

現今都下各劇場に於ける座附茶屋は。

- 歌舞伎座々附茶屋
- 上總屋 武田屋 中村屋 梅林
 - やまと 山本 三洲屋 さるや
 - 讃岐屋 菊岡 越前屋
 - 明治座々附茶屋

- 和泉屋 花屋 橋本 尾張屋
- 河内屋 吉萬 中村屋 武藏屋
- 山本 讃岐屋 さる屋 新高
- 日野屋
- 新富座々附茶屋
- 上總屋 武田屋 中村屋 梅林
- さる屋 相摸屋 紀の清 新むさし
- 春木座々附茶屋
- 若松 吉野屋 萬屋 つちや
- 大和屋 丸屋 新むさし
- 市村座々附茶屋
- 和泉屋 龜萬 つみや 魚十
- 萬金 海老屋 ひささや
- 東京座々附茶屋

魚十 布袋屋 河内屋
 川上座々附茶屋
 川見 重の井
 宮戸座々附茶屋
 中菊 やまど 萬金
 眞砂座々附茶屋
 稲田屋 河内屋 やまど 紅のや
 淺草座々附茶屋
 龜萬 萬金 海老屋 杉大和
 濱伎座々附茶屋
 やまど屋 紀伊國屋
 等著名なり

第七十一 俳優

劇場の數前記の如く多ければ、従つて出勤俳優も無慮數百名を以て數ふ、今名題以上について有名なるものを舉れば
 市川團十郎 市川家九代中此優に及ぶものあらざるべし、空前の名優にして、技藝の本領は莊大にして沈着なるにあり、最も時代物に妙にして、又世話物にも堪能なり、蓋し名優中の名優と稱するものなり。
 尾上菊五郎 尾上家の五代目なり、家の藝は怪談物に得意にして、頗る故小團次の藝風あり、技藝の精細なるは天下に比なし、最も世話物に長し、又御家物の色敵に適すれども、時代物も功者なり、

元より器用の優なれば、何役をもやつて欲らざるなく、團十郎と共に東西の兩大關たり。

市川左團次 團十郎、菊五郎と共に三名優と稱せらる、本領は實敵にあり、大川友右衛門、丸橋忠彌、碁盤忠信、一心太助等の如き役は最も評判よろし。

市川團藏 一昨年迄市川九藏と稱したりしが、父團藏の跡をつぎて團藏となれり、現時實悪の名手は此優に及ぶものなし、仁木彈正の如き團藏を指して他に求むべからず。

中村芝翫 大阪俳優中村歌右衛門の系統を引ききたる俳優にて、此優の藝風は鷹

揚にして諸事に餘裕あり、舞踏は團十郎と並び稱せらる、名人なり、惜いかな高齡にして利老耄せり

市川權十郎 東京俳優中第一の金満家の噂あり、技藝は時代物又はお家物に適す、松平伊豆守、伊井掃部頭、水野十郎左衛門、本多内記の如き役は手中のものなり。

市川八百藏 時代物の高尙なる役に向く市川家十代目を以て目せらるれど所作なきは惜むべし。

市川壽美藏 何役をしても調寶な俳優なり、相役の相手をして居る風あれど怠慢ならず、

市川小團次 高橋も傳の狂言に高橋浪之助役にて評判を得しより、世評俄かによろし、名優小團次の繼續者なり。

片岡市藏 大阪出身の俳優なるも、今は東京の水に染み、市中の評判宜ろし、此優の本領は敵役にあり。

市川猿之助 上品なる役には向かされど、役によりては此優ならては叶はず又所作に長せり。

市川荒次郎 左團次の弟にして二枚目敵に妙なり。

澤村訥子 左團次の藝風に酷似せり、最負客なかく多し。

中村時藏 藝道に熱心にして上手なれ

ど、評判あがらず、惜むべし。

市川染五郎 濱町の振付師藤間の子なれば、幼少より舞踊に妙なり、當時の人氣俳優なり。

市川宗三郎 元大阪役者にて春木座より一躍して歌舞伎座の槍舞臺に上りし以來、評判悪しからず。

尾上松助 松助以後此優の藝風は求め得難かるべし、常に菊五郎の番頭役者たるを甘んじ自から頭角を顯はすを欲せざるが如し。

中村勘五郎 故仲藏の系統をひく藝風も仲藏に似てかろし。

市川米藏 先年時事新報より投票大多

數にて賞牌受けたる程の人氣俳優なり。

市村家橘 故家橘の長子なり、未だ若年なれど中々評判よし、當時眞砂座にての利者なり。

關花助 名優故關三十郎の遺子にて、宮戸座興行の度毎に市中の評判よし。

大谷馬十 老練の藝風にて眞砂座の立物なり。

中村翫太郎 藝風の輕きにては此れに指を屈すべし。

坂東又三郎 和好と稱して二錢團洲と呼ばれしが、又三郎と改めて愈々評判よし、酒井左衛門大星由良之助等見るべし。

尾上幸藏 菊五郎の門弟にて、能く師

の藝風に似たり。

坂東難助 器用なる俳優にして技藝老熟せり、故彦三の門弟なり。

中村福助(女形) 新駒とて其名團十郎と共に響く、梨園社會にも亦勢力ありて、給金の點も實に團十郎の次位に居る、技藝優婉にして品格高く、容貌秀麗なり、されば姫君等の役を始め、高尚なる女形は、此優の右に出づるものなし、當時の立女形なり。

坂東秀調(女形) 奥方又は世話女房に依れり、技藝回熟にて細密なり。

澤村源之助(女形) 元清十郎といふ、意氣にして品格を要せざる世話女房に

は、先づ此優に指を屈す、藝妓、職人の女房、悪黨の女等は、體軀に倣りて寸分の隙なし、春雨傘の丁山、赤格子のかしく等殆ど比類なし。

岩井松之助(女形) 藝者風は源の助に似たれど、味は稍及ぶべからず。

市川女寅(女形) 元大阪役者にて福之丞といふ、近來藝道めきくと進みたり、外貌の寂氣なるは惜むべし。

尾上榮三郎(女形) 菊五郎の丹精にて藝道進み、能き女形となれり、顔に色氣あるは此優の利益なり。

中村富十郎(女形) 元春木座にありて梅太郎といひしもの、名家を繼續したり

しより反て名聲少なし。

尾上多賀之丞(女形) 品格ある女形にて先代萩の政岡など評判よかりしが、近年は地方へ出かける事多し。

此外に書生俳優あり、川上座を以て本據とす

- 川上音次郎 福島 清
 - 井伊蓉峯 石田 信近
 - 藤澤淺次郎 水野 好美
 - 山口定雄 福井茂兵衛
 - 高田 實
- 等世評よろし、重に戦争、探偵劇、翻譯小説等を演じ、立廻りの活潑なるが、東京人士の嗜好に適せり。

女役者にありては、技藝の巧妙にして容貌美なるもの少なからず、然れども東京の風古來女俳優を尊ばず、爲に此等の俳優にして槍舞臺に上る者なきは惜むべし。

市川兼八 四十郎の藝風に似て所作に巧みなり、此優一度舞臺に上れば、一見男子の如くして、殆ど識別し難し、然れども道成寺の如き、八重垣姫の如きを演ずれば、忽ち妙齡の美人となり、窈窕たる淑姬となり、人をして其年齢の六旬に近きを知る能はざらしむ。

寄席

市川かつら 美人にて所作に上手な

り、兼八座一の入氣者なり。

此外、錦升、桂枝、紫女八、米坂等皆女優の錚々たるものなり。

第七十二 寄席附落語

寄席は東京人士が娛樂の一にして、晝間各般の業務にたづさはりたるもの、歸來晩餐後、行いて一夕の耳目を樂しませんとするに恰好す、木戸錢は四五錢より、高きは十錢に及ぶ、中入には菓子、餅、茶を賣り、夏時は氷水ラネムをも賣り、以て客の需用に應ず、演藝の種類は落語、講談、義太夫、浪花節、操、人形、手品、獨樂廻し、手踊、音曲、其他、雜藝にし

て、此内講談、義太夫、浪花節は各獨立して他藝を交えず、色物は落語を本とし音曲其他の雜藝を交ゆるを以て頗る變化に富めり。

演藝の場所は客座より三尺許高く座を設け、之を高座と呼び、廻負連より贈れる後器を引く、演藝の時間は六時頃開場し、十時頃閉場す、間々查興行をなせども多くは講談、義太夫なり。席亭は各區に散在して其數多し、今著名なるものを擧ぐれば日本橋區に於ては、常盤(色物)馬喰町、福本(講談)兩國廣小路、木原(色物)木原店

新柳(義太夫)元柳町、立花(色物)米澤町、大ろじ(色物)菅屋町、末廣(色物)新和泉町、宮松(義太夫)茅場町、伊勢本(色物)瀬戸物町、京橋區にありては、金澤(色物)銀座一丁目、講談場(講談)南鍛冶町、銀座亭(講談)銀座四丁目、川端亭(色物)靈岸島、つる仙(義太夫)南鍋町、壽亭(講談)卅間堀町三丁目、神田區にありては、

立花亭(色物)通新石町、和泉亭(義太夫)和泉町、川竹亭(色物)表神保町、市場亭(浪花節)美土代町、白梅亭(色物及講談)連雀町、小川亭(義太夫)小川町、日本亭(義太夫)五軒町、染川亭(色物)塗師町、下谷區にありては、鈴本亭(色物)上野廣小路、久本(色物)竹町、吹拔(色物及義太夫)數寄屋町、本牧亭(講談)上野北大門町、本郷區にありては

若竹亭(義太夫)東竹町、清水亭(浪花節)根津、淺草區にありては、東橋亭(義太夫)花川戸、大金亭(色物)茶屋町、新福亭(色物)新福井町、並木亭(色物)並木町、柳盛亭(義太夫)向柳原、本所區にありては、廣瀬(色物)相生町、染平亭(義太夫)中の郷、米本(義太夫)三つ目、緑亭(色物)緑町、花若亭(浪花節)同

深川區にありては

- 廣川亭 (義大夫) 富吉町
- 櫻館 (色物) 黒江町
- 三つ木 (色物) 西森下町
- 常盤亭 (浪花節) 高橋
- 赤坂區にありては
- 萬年亭 (色物) 一つ木
- 琴吹亭 (色物) 青山北町
- 芝區にありては
- 玉の井 (色物) 日蔭町
- 小金井 (色物) 濱松町
- 琴平亭 (講談) 琴平町
- 惠智十 (色物) 南佐久間町
- 八方亭 (色物) 愛宕下町

三光亭 (色物) 愛宕町

金本亭 (義大夫) 三田同朋町

麻布區にありては

麻布亭 (色物) 三河台町

福槌亭 (色物) 宮下町

麹町區にありては

青柳亭 (色物) 元園町

富士本亭 (義大夫) 九段坂

万長亭 (色物) 山本町

四谷區にありては

山本亭 (色物) 天玉横丁

喜よし (色物) 麹町十三丁目

牛込區にありては

蕪店亭 (義大夫) 袋町

石本亭 (義大夫) 神樂坂

若松亭 (義大夫) 神樂町

小石川區

初音亭 (義大夫) 初音町

表中色物とあるは落語に種々の雑藝を交へたるものなり

然して、是等無数の席亭に出席する藝人數百名尤も多きは落語家なり、今其内幕なるものを得たれば一笑に供す。

落語家の内幕

「三遊派と柳派」世間の短所で飯を喰ふ者、音曲家と合せて、目下市内に四百餘名、内真打三十餘名あり、分れて三遊派、柳派の二つとなり、三遊派は三遊亭圓生

を、柳派は春風亭柳枝を頭取と仰げり、兩派とも組合規則の下に團結して、互に其技を勵み、人氣を争ふの餘り、往々確執を生ずることあり、又は内輪喧嘩をなして離合することはあれど、先づは兩派とも負けず劣らず、克く客を笑はせ、所謂胸膈を開かせ居れり。

兩派の頭取 別に頭取の選定法なし、從來三遊派は圓朝、柳派は蕪枝にて引受け居りしが、其後辭任し、今は前記の兩名之に代ることとなり、

出席の組合割附 一月一日より十二月三十日に至る、毎月上下の十五日間、上は一日より十五日迄下は十六日より三十日

迄を云ふ各席亭へ出席する真打以下の組合割は、殊め毎年十一月初酉、二の酉、三の酉（即ち酉の市）の日を以て、頭取幹事真打席主、并に五厘と稱する斯道の世話役等集合して、協議の上之を定め、日本橋區浪花町谷川のピラ屋方へ廻し置き、其月々のピラを各席亭へ配付せしめ、席主は所轄の警察署へ届け、湯屋理髮店等へ張出廣告をなすを例とせり、ピラの入費は總じて席持なるが、中には張込みて一層美麗に刷立る向もあり、尤も場合に依りては、其月に至り、更に席亭より、出席組合の差替方を申出る事あるよし。出方と席亭との割は以前にありては席

亭四分出方六分の割合なりしも、近年は三七位となり、例は木戸錢一人前五錢なれば、百人に付き五圓となるに付き、其の内の三分即ち一圓五十錢を席料として引去り、残り三圓五十錢を樂屋のものとして、扱て又樂屋にては真打の者之を受取り、内一割即ち三十五錢を積立金に引去り、残り三圓十五錢を真打以下にて夫々分配するものなるが、其分配割は、真打は客一人に付き一錢以上、真打にして中入前後を助ける者五厘乃至四厘、二枚目二厘五毛、三枚目三厘、其他相中上の分二厘五毛、二厘、一厘五毛、（三味線物は二八たりとも矢張一人分の割）前座は客

の頭取に拘はらず、上三十錢、中二十五錢、下二十錢より十五錢の割合にて配附するなり、尤も來客不入（百人以下）にて、此割合に割當てることゝの氣の毒なる時は、真打は無給又は持出しにて相當の割を拂ふよし、殊に近頃は、何れの寄席にても、出方の多きを望み、一組十四五人、趣くも十二三人の出席を常とするか故に、客足の趣き時は、懷都合別して面白からぬに引換へ、席亭は下足一人に付き一厘五毛宛を、前肥五厘と稱する世話役の手當として送るの定めなれば、各席を合する時に、五厘屋の收得甚だ多しとなり、此五厘屋は兩派合せて五六名に過ぎ

ず、即ち斯道に由緒ある者ならでは容易に此役となる能はざるものにて、目下三遊派に於ける五厘屋は、淺草區瓦町の橋屋圓之助事申村代次郎及び同町の増田伊知の兩名なり、真打欠席の罰法、真打は其席の主人公なるを以て、來客も重に此一人を當込みに詰かけるなり、去れば真打の不参する節は、客の失望此上もなく、組合出方の者も止むなく次席の者を登せて其場を濟すもあり、又は一度高座に上りたるもの數名、打寄り茶番杯を催して御茶を濁すもあり、或は斷り言ふて半札を出もあるが、斯ることの度々なる時は、自然客足の減

ずるとして、席主の迷惑からず（實際の病氣なれば他席の眞打を差繰り掛け持ちさす）其爵として各席申合せ此眞打の看板を掲げざるの定めなり、尤も十五日間の内御座敷又は其他の事故にて欠席するは此限りにあらずして、假令不参なるも組合の者より、看板料として相應の歩合を出すよし、因に記す眞打の内にも三段あり、前に出る助眞打の方か、遙かに上手にて、來客の七分は其者の爲めに結かくる場合には、此助眞打は本眞打の者より却つて多くの歩割を取るなり。

二十前後より此道に入る者多しとぞ、弟子入には別に之といふ制規なく、唯寄席の主人とか、或は所の顔役とかに就きて、三遊派なり柳派なりの眞打へ世話して貰ふ位に過ぎず、又弟子となりたればとて別段師匠の教を受けるといふにもあらず、毎夜師匠の出席する席亭へ出掛け、兄弟子又は他の者が席上にて演ずる模様を見もし聞きもして、自然と習古を爲し、又は未だ客の一名も來らざる間に席に登りて、何なりとも思ふ存分を演し、其善惡を師匠其他のものより指南さるゝまでにて、其餘は師匠其他の羽織を疊み、又は席上の敷蒲團湯呑茶碗の上げ下ろし、

後幕の掛け外し、見立道具飾附の手傳ひをなし、斯くして半箇年位は僅か四五錢位の小遣（折には仲間の者より幾等か小遣を貰ふ事もあり）を貰ひ、其中漸く前座となれば八錢乃至十錢位、一ヶ年以上を経て聊か客の笑ひを買ふやうになれば十五錢乃至二十錢（尤も二十五錢もあれば是は前座としての最上給）を得べく、夫れよりは自分の口次第にて中入前二枚三枚となることを得れども、眞打となるは尙ほ容易ならず、至極器用の者にても、大抵十年乃至十五年の功勞を積み、然る後ち抜群の伎倆あれば始めて眞打となることなり、因に記す維新前には弟子

となるには身許引受人を要するなど一通りの定めあり師匠自から落語を教授せしこともありたれど、近來は其定めも何時か崩れて前記の有様とはなりたりとぞ。

師匠の間柄 は前項記す如き振合にて、他の替古と違ひ、云は、自分の器用不器用次第にて出世する譯なれば、師と云ふも名のみ、弟子と云ふも名のみなり、左れば弟子の師匠に對する禮義も至極冷淡にて、假令出世するとも之が歩合を納むるといふにもあらず、唯年始に砂糖一袋、年末に五寸備へ一重を持參するが關の山なり、又師匠たりとも自儘に我弟子を前

行	正	燕
金	之	一
之	助	枝
文	左	橋
五	太	之
郎	郎	助
治	龍	朝
六	正	三
圓	ん	一
朝	蝶	源
	藏	之
	夫	蝶
	夫	齋
	藏	水

第七十三 藝妓

教坊軒を列ね、妓院廂を接するの所、婀娜たる嬌軀は楚々人を動かし、微風香袂を吹いて奇薫徐るにせまる、若夫れ一度笑めば百媚生じ二度顧みれば家を傾むくるの風致ある者、宛として美玉の盤上に宛轉たるの聲、之を見之を聞けば、有情の男子孰んぞ銷魂せざるあらんや。

藝妓の濫觴は永久三乙未歳（本年より七百八十三年前）島千歳若の前の女舞に起因す、世之を白拍子といふ、實に我朝に於て妓の技藝を以て容に鬪ぐの始めとす、降つて徳川氏の世となり、泰平の餘澤は靡然として奢侈を恣にし、豪華を競はしむるに至り、茲に始めて藝妓なるものを出すに至れり。

藝妓は實に江戸生粹の標致あるものにして、張と意氣地の二つには、嬌軀を擲つて惜む事知らず、藝は賣れども情は賣らざる格言は、實に江戸妓流の確守する所の憲法たりしが、下つて明治十年以降

維新以後より敗者の地位に陥れる東京入士の氣風の漸く敗類を極めたるも、戦後の氣風豪遊を恣にするに於て、終に其技藝を以て賣りたる者も、遂に色を鬪ぎ淫を賣らざる能はざるに至りたるは、實に公然の秘密にして蔽ふべからざるなり。

明治の初年に於て、深川の教坊猶其盛を極め、素肌の帷子の伊達風俗は、八幡鐘の音と共に聞えたるの頃、小せんちとは等の名妓あり、風貌の美と技藝の妙とを以て鳴る、其千聘一度應じて到れるの時、蒲酒風流の儂は宛として古代名媛の標致あり、雲鬢はこれ一朶の烏雲、明眸は

これ万葉の櫻、玉容はこれ一塊の皓雪、若し夫れ一度引結びたる朱唇を綻ばせば、無情の硬漢も忽ち其魂を飛ばさしむ。坐に當つて絃を促せば、杯盤狼藉の間、昏倒濛冥たる醉客も爲に容を改め、滿坐音を絶ちて唯啾啾たる嬌音の梁塵を躍らすを覺ゆるのみ、實にこれ陽春白雪の悽婉として人に薄るの趣ありて、嘈々切々、或は急に、或は緩に、忽ちにして清泉の岩に咽びて銀珠を迸らすが如く、忽ちにして秋風の蕭條として松葉を渡り漣を漂はすに似たり、然して又眉を昂げて嬌嗔を發すれば、凛たる嬌音朱唇を衝いて裂帛の如く、奮然として袂を拂ひ、驟然と

して席を蹴て立てば、満坐の傲客情として言なし。これを僅々十數年後なる今日に比せば、今昔の感果して如何ぞや、抑も斯の如きものは實に江戸藝妓の意氣地にして、又明治初年迄の氣概たりとす。今日は藝妓の氣風大に散類して、又昔の豪俠なく、藝を賣らずして淫を鬻ぐの悪習無きにあらずと雖も、然しながら猶帝都の藝妓なり、風に柳の靡くも見せて、然も一點の靈光綿絮たるものあり、之をして我意に従はしむるは、蓋し容易の如くして然も難き所なしとせざるなり。藝妓となるには中年よりして此道に入る者も多けれど、到底下地見より叩上げた

る腕には及ばざるべし、下地見は仕込中の少女を言ふ者にして、其未だ離妓とならざる者なり、技稍熟して席上の舞旋に堪ゆべきに及び、始て離妓となる、之を半玉といふ、蓋し藝妓一本の玉の半價を以て聘せられ得るよりいふなり、離妓の稍長じて一本となる時は、始めて女一匹の藝妓となりしものなり。一般に藝妓といへども其内幕に入れば、丸抱へ即ち年期中もあり、自前もあり、或は叩き分け、或は四分六、七分三分等は抱主との契約によりて、收得の利益を分配するの法なり。藝妓の玉は廿五錢にして、纏頭は藝妓屋

の所在地によりて高下あれども、普通は一小酌の席に侍せしむるを以て二回を最上とし、一回を下等とす、其遠出等は俄かに律すべからず、若夫れ燈影漸く暗うして、軟語僅かに漏るゝの時、玉釵落ちて聲あらば、誰れか春宵一刻の價を知らん。柳橋 は由來藝妓の本場所と稱せらる、深川の教坊衰へ、名妓の玉容再び見る能はざりしより以來、此地を以て藝妓生粹の地となす、新橋に比して藝妓の數稍遜色なりと雖も、藝の至妙なるものと、技の絶美なるものと、然して又扮装の淡薄にして濃厚ならぬものとは、今も尙古江戸の儂を此處に止めぬ。

霞町 は技を以て鳴る者多し、客筋の多くは投機商、商人にして、粹と稱せらるゝ、通客の多きを以て、妓流も又従つて化せらる、明治の初年一時名妓の輩出したりし頃、儂輩に卓絶したるものを出したる、其儂今見る由なきも、尙新橋柳橋と並び稱せらる。新橋 を別つて二とす、橋南は烏森にして、橋北は金春といふ、新橋は藝の卓絶せる者よりも、寧ろ容貌の秀麗なるを以て著ける、金春の教坊は、銀座、三十間堀、鍋町等に散在したるもの、合して一大藝妓町を組織したるが如き傾あり。明治の初年に於て、木遣くづしを以て有

名なりし熊次の如きも、人は新橋の妓といへども、實は銀座教坊に籍をかへたりしなり、此地は實に方今藝妓街中の翳者を以て目するに足るべく、金春鳥森を合して、大小の藝妓無慮六百餘名、以て其全盛を極むるを知るべし。

此地の藝妓は重に内箱なるものを使ふ、内箱は婦人にして、藝妓の送迎をなす事、尙見番會所の箱屋の如し。

神明 は往古にありては、技藝に秀でたる者を輩出したるの所、今大いに衰へて當年の意氣なしと雖も、尙六十名内外の妓を有す。

下谷 藝妓とは數寄町同町等に散在

せる藝妓をいふ、往古江戸隆盛の頃は、近傍に上野寛永寺の宮師なる者ありて、豪遊を極めたりしを以て、其餘澤を榮る多かりしと雖も、尙方今の繁榮には及ぶべからず、現今大小の妓併て百餘名、日本橋、霞町、柳橋、新橋等に次いで頗る名聲あり。

日本橋 これ東京市の中樞なる、日本橋區通二三四丁目の西仲通附近に散在するもの、元大工町、檜物町、數寄屋町等にある教坊百餘戸の總稱なり、江戸時代に在りて、此地は柳橋、深川等に及ばざりしが、明治の初年深川教坊の妓多く、此處に轉籍したりしより、標致の鮮妍たるも

の技藝の卓絶せるもの、忽ち幾多の教坊を壓して、一時此地を以て本場所と稱するに至りたり、然れども歳月匆匆とし、て烏兎忽ち飛び、是等の名妓は漸次落籍し廢業するに及びたるより、又當時の翳々たる者は見る可らざれども、尙其感化を蒙りて、自然技藝を以て著はるゝに至る。

吉原 廓内の妓は、往古より決して客の爲に春を賣る事なし、賣る者は断然之を廓外に放逐す、これ蓋し娼妓に對する權衡上より然りしならん、之を以て數百の妓流は、藝を以て賣り、容貌を以て誇らざりしが、近來美風稍衰へ、花顏美

玉の如き妓の、媚々焉として金歩を掻かすを見る、されども流石に廓内に於ては豪客も又之を如何ともする能はず、之をして我意に従はしめんとせば、必らずや遠出を懸けざる可らざるなり、然れども不言不語境に彷徨する秘事は知るべからず。

此地の名物として、毎歲には、かなる演藝あり、これ廓内に於ける一種の景物といふべく、是等大小藝妓の演ずる所にかゝる、男藝者のにわかあれども、こは殆んど餘興なるべし。

講武所 は眼鏡橋外、外神田にある妓をいふ、其講武所の名あるは、徳川氏の

頃、此處に武術講習所を設けて、旗下の子弟を涵養したるにより、今も其名残れり、かの竹刀の音高く冴えて、壯士行の吟聲を聞けるもの、今は三絃の切嘈として三下りの俗謡耳に奏しきに至る。此地の妓往々才色兩全の者あり。

牛込 は神樂坂の上にある藝妓屋をいふ、此邊軍人官吏等の、能く呑み、能く食ふの徒多ければ、藝妓も敢て其技藝を専らにするを要せず、藝妓としては頗る營業し易き所なり。

赤阪 は溜池附近にある藝妓屋にして、田町通りに最も多しとす、此地も又神樂坂の如く、軍人官吏等の顧客多く、

殊に所謂御用商人等の、阿諛的馳走を其向の人になすが爲に、妓を聘する事あれば、妓も又其心組なかるべからず。

向島 墨堤の東畔須崎町にある十數軒の教坊をいふ、勿論本場所に比すべくもあらねど、往々本場所の落武者あるを以て、技藝の卓絶せる者なきにあらず、殊に此地は開花の候に於て、俄かに藝妓の増加する事あり、これ花時は觀櫻會のクヅレ等多きを以て、従つて妓の需用われはなり。

靈岸島 一に蒲島といふ、靈岸島附近にある妓にして、此地は廻船問屋等の顧客多きを以て、妓も又潤達の者多し。

新富町 橋下といふ、新富座創立以來始めて此處に教坊を設く、往時と雖も、三四の妓屋なきにあらざりしが、其隆盛の域に向ひたるは實に近來とす。

深川 仲町附近にあり、徳川氏隆盛の頃より明治の初年に及ぶ迄は、實に此地を以て名妓の淵藪と稱したりしなり、此地藝妓の外に羽織衆なるものあり、丈なす髪を短かく切りて若衆體に結び、幅狭き帯をつけ、其扮装は華美を厭ひて爲に紅紫の色を用ひず、舉動も又利刀の流水を斷つが如く、毅然として侵す可らざるの色あり、然も尙婦女子の躰を失はざりき、四時紋附の羽織を着して招聘に應じたり

しより此名あり。

羽織衆なるものは、已に徳川氏の頃に於て(今より六七十年前)跡を絶ちたりと雖も、藝妓の氣風は一種任侠の氣を帯びて、實に江戸藝妓の代表者たり、其顧客は深川木場の材木問屋を主として廻漕問屋等、資産家にして豪遊を試むる者多く、客も又所謂通客を以て自任する者なれば、妓を聘するに色を以てせず藝を以てす、故に其遊びや潔白にして、一も猥褻の臭氣ある事なく、實に江戸藝妓の摸範とすべかりしなり。

後年此地衰微に趣き、有數の名妓皆他に轉籍したりしより、狹斜の嬌色又見る

なく、消息香として聞ゆるなけれど、尙當年の傍は近來三四の妓家に残りり。

淺草の妓は、淺草公園及千束町に散在するもの、總稱なり、俗に山の蒸妓といへるは、奥山といへるを略したるなり、大小の妓合せて百七十餘名、顧客は中流の紳士商人等多し。

州崎は吉原と同じく、遊廓内にある妓なり、妓數凡そ七八十名、其多くは遊廓の移轉と共に、根津より轉籍したるものなり、其遊廓の吉原の次位たる如く、妓も又吉原に抽づる能はず。

植木店は茅場町附近に散在する妓にして、兜町株式取引所創立以來、其旺盛

を極む、此處の妓は菱町と連絡を通じ、機脈を繋げるを以て、妓數多からずと雖も、能く翠柳の色を恣まにす。

此外湯島天神木挽町四宿に於ける、其大同小異なるを見るべし。

第七十四 遊廓

天正十八年徳川氏の府を江戸に開くや、野草運を没し、狐狸寒月に叫ぶの大平原は、忽ちにして千戸甍を並べ、万戸軒を接するの大都會となり、諸國士民の府に入る者、沛然として水の低きにつくが如く、往來宛ら織るに似たり。是に於てか遊廓なる者の必要は、需用の

然らしむる所となりて、京都六條より移り來れるもの廻町八丁目邊にあり、駿府より來る者鎌倉河岸にあり、其常盤橋外柳町にあるものは、江戸出生の女子をのみ集めたるものなり、自來物變り星移り、江戸の地の愈々繁榮に趣くと共に、遊女町も又益々隆盛に及び、終に明暦三年の頃、吉原と稱して葺屋町附近にありしも、(庄司甚石衛門各地の遊女町を合して此地に一廓を設く)淺草の北隅千束田浦の邊に移轉す、これ實に新吉原の濫觴にして江戸遊廓の新紀元とす。

新吉原は實に古江戸の豪奢を念にし、東京の繁榮を集中したるの所なり、金殿

玉樓甍を接して、家々の光彩白晝を欺き、現じ出す不夜の城、年少子弟の足を此巷に在る者、茫然として自失せざるはなし。

古の名妓の詞に「傾城傾國に罪なし、道ひ玉ふ客人の谷なり、寒からぬ程に見て置け峯の雪、誠の粹とは此廓へ足をいれざる人をこそいふべけれ」と、觀に來れば、粹も無粹も必竟は同じ流れの谷川の水、誠に此廓に遊ばざるこそ、粹の粹なるものなるべけれ。

實潤扮装の伊達風俗に、廓内を横行せし六法男の狼藉をも恐れざる古名妓の儼は、世の進歩と共に見るを得ざれど、千

金散じ悉す一夕の夢と唄はれし紀文、奈其茂が豪遊は、今も猶見ざるにあらざる。廓内を分つて、京町、揚屋町、角町、江戸町、仲の町とし、貸座敷の數無慮百六十餘戸、引手茶屋九十四軒、藝妓屋百二十六戸の多きに及び、娼妓の數は實に二千七百有餘名、藝妓は四百八十餘人と稱せらる。春は仲の町の夜櫻に、美人の色を競ひ、秋は孟蘭盆の燈籠に、亡き玉葉の名残を止む、俄蹄の全盛は人をして歌舞の仙境に彷彿するかと疑はしむ。

若夫れ一双手千人枕、半點朱唇万客嘗と、悟れども、終には我も迷ひ入るべき魔界の巻、一度遊ばんは興もあるべし。

し、二度通ふは愚の極なり。

洲崎 遊廓はもと本郷根津にありたるもの、明治十九年の頃、官命じて深川洲崎の埋立地に轉せしむ、妓樓百餘戸、大厦高樓燦然として光彩目を驚かすの一大桃源なり、されども到底吉原の偉大にして壯觀たるには比すべからず。

此外南千住大千住板橋品川内藤新宿等各數十軒の妓樓あれども、一度吉原洲崎を見れば、又言ふに足らざるなり。

以上は概かに東京遊廓の一般をいふのみ、若し夫れ遊廓の變遷、遊女の逸話をのせば、實に本書數百卷を悉すも及ばざるべし。

第七十五 東京名所古跡

麴町區

宮城 九重雲深うして、鏡に畏こき宮居の御事、申すも畏けれど、これ万世一系の至尊の在ります所にして、東海日出帝國の光りは、大君の稜威と共に八荒に輝くぞ尊かる、宮城は長祿の昔上杉定正の巨太田道灌の始めて築く所にして、今の西丸これなりといふ、道灌罪なくして殺されしより、曾我氏に移り、北條氏の手に歸し、北條氏亡て徳川氏封を此土に受け、始めて大に土木を起し、所謂天下の

權威を以て營繕に善美を悉せり、爾來二百七十有餘年の間、徳川氏此城に在りて兵馬の權を揮ひたりしが、慶喜公大政を奉還してより、緑色濃き千代田の城は、茲に皇居と定められて、始めて東京城と稱せられぬ、明治六年祝融の災にかゝりしより、同廿二年御造營事畢り、赤坂假皇居より御移轉在まされたり。

櫻田門 は皇城の南に當たれり、此門外は安政五年井伊掃部頭が、刺客の手に倒れたる所なり。

二重橋 は宮城の正門にして、舊西丸大手門の橋と、書院門の橋と、相重りて見ゆるにより、此稱あり、今は一は鐵橋

となり、一は石橋となり、此宮城正門外より遙かに聖明殿を拜し奉るを得。

内閣 和田倉門を入りて右方、乃ち桔梗御門内にあり。

宮内省 阪下門の内なる廣大の建物にして、此門内は舊幕の頃安藤閣老が要撃せられたる所なり。

和田倉門 馬場先門と共に宮城の東方にあり。

竹橋門 明治十年西南役後、有名なる竹橋暴動のありし處たり、昔は此處より田安門に至る間を松原小路と呼びしとぞ。

田安門 今の一ツ橋具附なり、此門内

に舊田安家(徳川)の邸第ありしにより名づく。

半蔵門 宮城の西面、廻町通に向ひて立つ。

靖國神社 別格官幣社にして、明治二年の創設にかゝる元招魂社といひしか、後改めて靖國と呼ぶ、蓋し此神社に祭られたる戦死者は、國を靖んずるといふの義に取れるなるべし、毎年五月、十一月大祭あり、饒馬相撲花火等催さる、海陸軍人の参拜あり。

遊就館 靖國神社の境内にある煉瓦造の建物なり、海陸軍に關する武器武具及戦死者の遺品等を陳列す。

大村兵部大輔銅像 巍然として雲に聳ゆるは、故兵部大輔大村益次郎の銅像なり、位置は靖國神社境内、饒馬場の中央にあり。

星岡公園 溜池に臨みて鬱蒼緑陰をなせるの丘陵なり、此地眺望絶佳にして、四時の清遊によろし、茶寮あり、星岡茶寮と呼ぶ。

日枝神社 長祿の初年太田道灌が江戸城の鎮守として祭祀せるなり、國常立尊、伊弉册尊、仲哀天皇を祭る、社内に三十六歌仙の額を掲ぐ、狩野法眼探幽の筆なり、地は星岡公園の一隅にして、老杉怪松亭々として空を蔽ひ、尤も閑雅幽邃なり。

り、此神社の祭禮は、山王の祭りとして、東京第一の祭禮たり。

寅藥師 行基菩薩の作にして、廻町八丁目の北新道にあり。

平河天神 平河町一丁目にあり、文明十年江戸の城主太田道灌、武州川越の三芳野天神を勧請せしが、徳川氏の江戸に入るや、天正八年平河口に移され、慶長年間又今の地に移轉し、寛政七年神殿を改築す。祭神は菅原道實朝臣なり。大祭三月十五日。

日比谷大神宮 伊勢大廟の分廟たり、有樂町三丁目にあり。

清水谷 紀尾井町にあり、此邊八重櫻

多く、花時遊覽するもの多し、清水谷公園には、維新の元勳大久保利通公の碑あり、大久保公は明治十一年皇居より退出の歸途喰違に於て暴徒島田一郎杉村乙菊等に刺されしなり。

神田區

神田神社 本郷台の東端宮本町にありて、眺望絶佳の地を占む、祭神は大貫巳尊にして、平將門の靈をも祭る、此神社は所謂神田つ兄の氏神たるを以て、祭禮の華美なる事目を驚かす。
番聖堂 御茶の水の畔にあり、今教育博物館のある處なり、大成殿は孔子の像を祭る、舊幕の頃幕臣の子弟が入つて學

びたる所にして、舊江戸時代の大學たり。

御茶の水 神田川の畔、今御茶の水橋の架れる下にある井戸なり、極めて清水なりしかば、代々の將軍、御茶の水に用ひられたるより此名稱起る、井戸の舊形のみは今尙存す。

お玉ヶ池 松枝町にあり、今は名稱のみにして町家となりぬ、口碑にいふ、昔此の池の汀の櫻の下に掛茶屋ありて、其の娘にお玉といふ美人ありしが、二少年此お玉に戀慕して互ひに靡かせんとす、お玉二人の情の切にして、其孰れにも從ひ能はざるより、終に此池に投じて死し

たりといふ、今も尙お玉が池稻荷なる小社あり、お玉の靈をまつるといふ。

三崎稻荷 三崎町にあり、神田川上流の畔なり、北條氏綱天文年間の遺營なりといふ。

日本橋區

水天宮 蛸殿町二丁目にあり、安徳天皇を祀る、建禮門院二位尼も合祀さる、筑後久留米の本社と同一軀なり、其以前は芝赤羽根橋の側なる有馬邸にありしを、有馬邸の移轉と共に此處に遷座さる、參詣人の夥だしき事他社の比にあらざり。
杉森稻荷 新材木町にあり、將門平親王と稱して不軌を企つるや、藤原の秀郷

之を誅伐せんとして、武運を此社頭に祈りしといふ。

兜稻荷 八幡太郎源義家奥州征討の時兜を納めて一の塚を築き、以て兜塚と稱せしが、近年何人か稻荷を勧請せしなり、位置は海運橋の邊、兜町に在り。

鍮橋 茅場町より蛸殿町の方へ架れる鍮橋なり、古へは橋なく、渡舟ありて、鍮の渡しといふ、義家の父頼義奥州征討に際し、此渡しをこへんとして風波高くして、諸軍大に苦しみければ、鍮を沈めて龍神を祭りしといふ、鍮の渡の名稱も是に起れり。

藥師堂 南茅場町にあり、本跡瑠璃光

如來は恵心僧都の作にして、慈眼大師の勸請なり、境内に宮松といへる寄席あり、彌生といへる西洋料理店、草津といへる割烹店ありて共に繁昌せり。

兩國橋 日本橋吉川町より本所元町へ架る木橋にして、長八十九間四尺、幅六間あり、昔此橋を以て、武蔵下總の境とせしにより此名あり、詩家は二州橋と呼ぶ、毎歳川開きの催しあり、此橋の上下河流にありて花火を打上ぐ。

新大橋 日本橋濱町より深川西元町に架する木橋にて、長二百間三尺なり。
永代橋 靈岸島より深川佐賀町に架する一大鐵橋にして、長百五間四尺あり、

永代の下は即ち隅田川の河口にして、大船巨舶繫留し、遙かに東京灣中の番砲臺を見る、月島越中島等指呼の間に横はりて風光明媚なり。

日本銀行 常盤橋外の宏壯なる大建築物にして、本邦金融の全權を掌握す。
日本橋 通一丁目より室町の方へ架る木橋にして、万治元年の創設にかゝる、此橋東京の殆んど中央にあるを以て、全國里程の起點とす、橋上往來の頻繁なる市中第一にして、車馬の往還等人をして眩暈を生ぜしむ、然して其橋の比較的狹隘なるも又人を驚かす。

京橋區

京橋 は銀座一丁目より五郎兵衛町の方へ架る石造の橋なり。

銀座通 舊幕府の頃銀座の設け此處に在りしを以て名づく、今は煉瓦を兩側に敷きて人道となす、家屋は昔な煉瓦造にして、我邦に於て洋風建築の始めとなす、日本橋通と共に、東都中樞の市街なり。

新橋 出雲町より芝口一丁目に架する木橋にして、鐵欄を設く、橋小なりと雖も、京橋日本橋に次いで繁雜を極む。
港稻荷 俗に鐵砲洲稻荷といふ、鐵砲洲港町にありて、古來有名の神社たり。

西本願寺 築地三丁目にありて、眞宗京都西本願寺の輪番所たり、万治元年の

創設にかゝる、俗に所謂築地神門跡なり。

濱離宮 築地四丁目にあり、新橋停車場の東隣海濱に在り、元濱御殿と稱して舊將軍家の別墅たりしが、今は離宮となり、延邊館を建てさせられ、重に外國皇族等を招待饗應するに供せらる。

靈岸島 箱崎町の南をいふ、昔僧雄尊靈殿、此地の海濱を埋めて一寺を創立し、靈殿寺と稱す、後故ありて深川に移るや、其後町家となりて、繁華なる土地となり。

石川島 佃島の北にあり、舊名森島又鐵島ともいふ、昔源義家が鎧を收めて神靈とし、八幡を勸請したるによる、其石

川島と稱するは、石川氏の祖先、此島を拜領したるによれり、今石川島造船所を設く。

佃島 徳川氏の江戸に移るや、攝洲住吉浦佃村の漁民を今の處へ移住せしめ、江戸灣の漁蝦をなして生活せしめたるに、佃島と稱あり。

住吉明神 これ本國住吉明神を勧請せしものにして、市内信仰する者頗る多し。

芝 區

芝公園 三線山増上寺の境内を公園に宛てたるものにして、廣袤七町餘、上野公園と共に、東京の二大公園たり、園内四時の花卉幽深なる景致に富む。

五層塔 俗に五重の塔といふ、丸山背後の森林中に建てり。

辨財天 蓮池の島中に勧請する所、維新前迄には此池中に巨大なる鯉魚泥鰌等多く棲みたりしが、官軍東下の時、兵卒等之を捕へて食したりしより、今は珍らしきものなし。

東京府勸工場 もと龍の口にありたりしを、近年此公園内に移せしなり。

愛宕神社 は愛宕町にあり、昔は勝地藏を祀りし寺院たりしも、今は社地となりて、懸崖絶壁十數丈の高地にあり、男坂は石階直立數百段、危険にして婦女子の登るに難し、女坂は階段多けれども迂

増上寺 開山は西譽上人にして、徳川氏歸依の寺たり、東園淨土宗の總本寺にして、構造偉大頗る壯觀を極む、寺内洪鐘あり、其音一里に聞ゆと稱せらる。

徳川家靈廟 二代將軍台徳院殿、六代將軍文春院殿、七代將軍有章院殿、九代將軍惇信院殿、十二代將軍徳院殿、十四代將軍照徳院殿の靈廟あり、孰れも輪奐結構の美を盡せり。

黒本尊 は増上寺本堂の後方にあり、惠心僧都の作あり、丈二尺六寸餘。

丸山 園内南方の高丘にして眺望絶佳なり、山上に維新前の測量家伊能忠敬の紀念碑あり。

回して登るに易し、山上の眺望は實に屈指の名勝たり、品海の煙波、房總の山、歴々として雙眉の間に聳るべし。

芝神明 増上寺大門の邊、宮本町に在り、豊受姫神を祀る、徳川氏の頃は社内の繁昌なる今に倍せり、境内には楊弓店、銘酒屋等多く、又藝妓屋の附近に散在するあり、大祭は例年九月十六日にして、此社の年の市は、歳晚屈指の光景たり。

金比羅神社 虎の門外琴平町にあり、大物主神及崇徳天皇の二座を祀る、本社は讃州象頭山の金比羅宮なり、毎月十日例祭あり、十月は大祭を施行す、近國

近郷より参拜する者夥だし、江戸見阪 芝野手町にあり、愛宕山の後方にして、江戸市中を一目に眺望するを以て此名あり。

綱阪 三田綱町にあり、渡邊綱が出生の地と言ひ傳ふ、此邊に綱が手引阪、綱が産湯の水、綱が駒繫の松等あり。

谷山 八ッ山ともいふ、高輪にあり、もと大日如來を安置せしによりて、大日山ともいふ、眺望絶佳の名區たり。

有喜壽森 下高輪舊松平土佐守の下屋敷と町家との間にありし古松をいふ、往年回祿の災にあひて今はなし、昔鶴といへる鳥の品海に踏るもの、此樹を踏とせ

し故に、鵜飼集といふといへり、古き小唄に「葛西の舟は女も漕ぐ、漕げやこげくうきすの森を目わてに」とあるより考ふれば、葛西行徳邊の舟子は、多く此樹を目標とせしものなるらん。

潮見阪 伊皿子森町より田町に出づる坂路なり昔時此邊に七崎ありといふ、潮見岬、月岬、袖ヶ崎、荒蘭岬、千代ヶ岬、長南岬、是等を合せていふなるべし。

櫻川 愛宕山の麓を流る、小流なり、往昔虎の門より此邊悉く田知なりし頃、畔に櫻樹幾株もなく植えたりしに、其間を流る、小川あり、櫻影倒きに水に浸せるより、今も此名残れり。

飯倉 西久保の南にあり、伊勢太神宮の御厨の地にして、御饌米を収めし所なり。

西蜜八幡宮 飯倉一丁目にあり、寛弘年間鎮座にして、慶長五年關ヶ原合戦の時勝利を誓願して奇特ありしといふ、現今の神社は寛永十一年の建立なり。

御穂神社 芝浦にあり 往古駿州三保の人此浦に住し、文明十一年古郷の御穂神社を勧請せしなり。

烏森稻荷 烏森町にあり、今より凡そ九百六十年前、天慶年間の鎮座にして、來由詳ならず、鵜口一個ありて、元暦元年一月と彫せらる、又足利成氏の願書

一通あり、享徳三年正月五日と注せらる、今より四百五十年前なり。

青松寺 愛宕山下の曹洞宗の古刹にして文明八年の創立になる。

泉岳寺 は高輪の海濱に臨み、山を脊にして建てらる、曹洞宗の寺院にして、橋場の總泉寺、芝の青松寺と共に、東京三ヶ寺の一たり、万松山といふ、總門の懸額に華僧闍沙門道滂の書にして、庚辰辛酉孟冬上浣と記せり、寺内に播州赤穂城主淺野長矩の墓及四十七義士の墓あり、又別に一堂を設けて、義士の木像及遺物を収め、今上陛下の勅額を下賜せらるゝの光榮あり、義人天野屋利兵衛

宇都宮十兵衛等の墓あり、又吉良義英の首洗井戸存す、抑も赤穂の義士四十七士は、淺野長矩の家臣なり、長矩殿中に於て、吉良上野介義英に辱めらるゝや、憤懣措く能はず、直ちに刀を抜いて之を斬る、及ばず、時に城中殿規あり、殿中に於て刀を脱くを得ずと、長矩乃ち死を賜ふ、其臣大石良雄以下四十六人、深く主公の無辜にして罰せられたるを憤り、怨みを吉良氏に復さんと欲す、思をひそめ、形を變じ、或は奴となり、或は僕となり、臥薪嘗膽、終に能く節を全うして吉良氏の首を獲、之を主の墓前に手向け、然る後從容として賜死の命下るを待ち、欣然

として割腹す、何ぞ其の義烈なるや。天野屋利兵衛 一商估にして、淺野家の用達たり、義家臣と同じからず、然れども天性義侠、深く義士の孤忠を憐れみ、資を助け、刀杖を貸し、陰に陽に百方悉す所あり、終に義士をして本懐を達せしむ、然して身は坐せられて刀下の鬼となるもの。宇都宮十兵衛 は薩摩の臣なり、始め大石の人となり慕ひ、必らず能く復讐の大義を全うすべきを期す、然るに何ぞ圖らん、良雄山科に在りて悠優自適、狹斜に通ひて酒色に溺れ、放蕩無頼言語に絶す、十兵衛之を見て大いに怒り、道に

擁して之を罵しり之を辱かしめて去る、後良雄の復讐を聞き、且つ放蕩の跡を粧ひたるは、吉良氏の心を怠らしめん爲たりしを知り、己れ之を辱かしめたる事を悔恨措く能はず、直ちに墓前に至り、割腹して罪を耐したるなり。物變り星移り、年を閱する二百有餘歳、枯骨朽ちて魂魄今何處にかある、然れども人の義士の孤忠を慕ひて之に詣する者朝夕絶へず、古木鬱々たるの下、香烟長に絶ゆる事なし。東禪寺 高輪中町にあり、妙心寺派の寺にして、本尊は釋迦如來、開山は嶺南和尚とす、境内に伊達家の墳墓、及其臣原田甲斐の墓あり、海上禪林なる寺門の額

は、朝鮮の人靈臺の筆なり。

麻布區

善福寺 雑色町にあり、眞宗にして本尊の彌陀は惠心の作なり、境内に親鸞上人の杖を植へたるが、技葉を生じたりしといふ、逆銀杏あり、又弘法大師の揚枝杉など來由ある者多し、開山は空海なれども、後故ありて改宗したるなり。龍泉寺 櫻田町專稱寺の内に在り、本尊は叢中より現出したる者故、何人の作なるやを知らず、筒井順慶の姪清心尼の尊信したる佛たり。氷川明神 三光町にあり、日本武尊が一ノ宮氷川の神を遙拜せし舊跡なりとい

靈南坂 溜池の上に在る坂にして市兵衛町へ通ふべき通路たり、慶長年中靈南和尙此地に住す、故に名あり。
 我善坊 古は龍前坊の字を用ゆ、徳川崇源院殿を茶毘したる所なりといふ、市兵衛町の隣にあり、舊幕の御家人多く此地に住す。
 狸穴 長阪の東にあり、昔大なる洞穴ありて、唯狸一頭棲めるにより此名あり。
 六本木 日が窪の北にあり、昔大木の松六本ありしより此名あり。
 半洗阪 日が窪より六本木へ上る阪に
 して、往昔芋市場のありしところたり。
 一本松 鳥居阪の上にて、老松一本ありしより此名あり、天慶の頃源經基此松に衣冠をかけしより、冠の松とよみ。
 赤坂區
 溜池 山王社地の西構より東南をまはれる池にして、昔時は蓮花の名所たり、今は僅に傍のみを止む。
 榎阪 溜池より麻布に出づる阪なり、大榎あるにより名づく。
 赤阪離宮 紀伊國阪の上にありて、明治六年皇城炎上の時より、同二十二年御造營竣功まで假居居たり、離宮の苑内廣サ十八万坪にして、林あり池あり山あり

瀑あり、四時の花卉に富み、宛ら仙境に遊ぶが如し、仙銀閣、洗心亭、秀芳亭等、尤も清雅にして神韻漂渺たり、此地はもと奥羽街道たりしを以て、御苑内に一里塚の舊跡を存し、西行休憩の井などあり、徳川氏の頃紀州侯の邸第たり。
 青山御所 英照皇太后尊、御生前の御座所たり、赤坂離宮と相隣りて、日本古代の建築に模す。
 氷川神社 氷川町にあり、素盞鳴尊大己貴尊稻田日姫尊の三神を合祀す、元一ツ木にありしを、享保年間此地に移す、境内老樹多く、黄金櫻など尤も有名なり。
 豊川稻荷 新町一丁目にあり、參詣人夥だしく、東都隨一の稻荷社たり。
 善光寺 青山南町六丁目にあり、信州善光寺の宿寺たり、慶長六年の建立にして、本尊は恵心僧都の作、中將姫の秘佛なりといふ。
 龍泉寺 一ツ木町にあり、浄土宗にして開山は隨流和尙なり、寛永十一年の創立にて、子安觀世音、樂師如來等を安置す、本尊の阿彌陀如來は行基の作なり。
 四谷區
 須賀神社 須賀町にあり、素盞鳴命を祭る。
 圓融寺 北寺町の古刹なり、寺中蜘蛛

の井あり、昔は山内に古穴ありて、涌出する水に毒氣ありしといふ、此穴は土蜘蛛の巢窟にして、渡邊綱が退治したりしより、其穴を埋め新に井を掘りしにより此名あり。

征寺 大木戸の前四谷山長善寺の一名なり、此邊笹多ければよりて名づく、或は寛長年中將軍鷹野の歸途此寺に立寄りて名づけたりともいふ。

千駄谷観音 一に眼玉の観音といふ、昔一賊あり、觀世音の雙眼黄金なるにより之を抉らんとして頓死したるにより此名ありといふ、千有余年前の古刹にして、淺草觀世音と共に其名高し。

沙千観音 南寺町海樂寺にあり、村上義清の持佛なり、一尺許の坐像にして、此坐像潮時／＼に濕ふにより此名あり。

牛込區

市谷八幡宮 市谷にあり、神功皇后應神天皇を祭る、天明年間太田道灌鶴岡より勧請せしなり、社地高丘なるを以て、前に市谷牛込の見附を臨み、眺望尤も佳なり。

築土八幡 築土銀町にあり、仲哀天皇神功皇后應神天皇を祀る、嵯峨天皇の御宇、此地に一老翁あり、白鳩の飛び來れる地を下し、此處に八幡宮を建つ、其後文明年間に至り、上杉朝興修飾して産神

とはなせり。

若宮八幡宮 源賴朝泰衡を征伐の時宿願をなし、鶴岡若宮八幡を移す、文明年間太田道灌又これを修飾せり、社は牛込若宮町にあり。

高田八幡宮 高田にあり、穴八幡といふ、寛永十三年徳川氏の臣松平某の建立にかゝる、其穴八幡の稱あるは、法印秀雄草庵を結ばんとして、古窟を得たるによれり。

築土明神 築土銀町にあり、天慶三年將門の誅せらるゝや、其首を江戸平川観音堂に移し祭れるを、太田道灌此處に勸請せるなり。

赤坂明神 上野國赤城山の神を祀る、往古大胡氏の尊奉神たり。

宗柏寺 早稲田にあり、本尊釋迦如來は傳教大師の作なり、往昔織田信長火を敵山に放ちし時、護持の人、此佛を火中より救ひ來りたりといふ。

神樂坂 牛込門外の長坂なり、市ヶ谷八幡祭禮の際、神輿を此坂下に止めて樂を奏せしより此名あり。

輕子坂 神樂坂の東にありて逢坂といへり、桓武天皇の御宇、小野美佐子なるものあり、此坂の側に住めるを以藤といふ美女を慕ひ、其後召によりて南都に上れども、其女の事を思ふて旅中に死す、

女も又此事を聞いて坂の下なる川に投じて死せり、其輕子坂の稱あるは、坂下の川より荷揚するもの多きより、荷揚人足の輕子と稱する者、此近傍に住せるより起れり。

蚊屋か淵 船河原橋の下をいふ、昔慘酷なる姑あり、嫁をして蚊帳を此水に洗はしめしに、流れ急にして蚊帳と共に捲かれて死せり、故に名づく。

淨瑠璃坂 は市ヶ谷にあり、淨瑠璃演劇ありしにより此名あり、此地は舊幕の頃、奥平源八が父の仇奥平隼人を討ちたるより有名となれり。

小石川區

牛天神 水道端町にありて、砲兵工廠の西北隅の後なり、一に金杉天神といふ、昔源胤朝東國征討の際靈夢に感じ、元暦元年の頃天然牛形のを尋ねて勸請したるなり、社壇の高麗狗は運慶の作にして、元禄五年社壇修繕の際、水戸家より賜はりしなり。
護國寺 音羽にあり、眞言宗にして亮賢僧正の開基なり、本尊は瑪瑙石馬頭觀世音にして印度傳來の靈佛といふ、寺域四万七千坪、後方權現山を以て、豊山岡御陵とす、維新の元勳三條實美公の墓は此寺にあり。
傳通院 は淨土宗十八壇林の一にし

て、應永二十年の建立なり、寺號は徳川家康の母傳通院殿の墓所たるにより名づく、境内老杉怪松雲を凌ぎて幽邃閑雅なり、寺中も福の井あり、初め此井戸を堀るに當つて、一の大黒天の像出でたるより此名あり、大黒天は寺中昌北院に安置し、今尙參詣多し、寺域廣大にして七不思議の古談あり。位置は小石川表町、安藤坂の上なり。
目白不動 關口町にあり、本尊は弘法大師の作なり、寺内に袈裟掛の松あり。
後樂園 蓄水戸侯の庭園にして、今砲兵工廠の構内にあり、園内東海道五十三驛等ありて、東都有數の邸園にして、又園

藝の標本たり。
鶯谷 は金剛寺坂下の谷にて、其古は鶯の名所たり。
極樂水 傳通院の後久堅町にあり、昔童女ありて、佛法に徹底するの時、此水涌出したりと言ひ傳ふ。
植物園 これ理科大學の管轄する所、舊幕御藥園の後たり、世界各国の植物を栽培試験するの用に供すと雖も、又諸人の縦覽に供し、珍花奇卉、人目を驚かすものあり。
初音里 植物園の近傍にして子規の名所たり。
氷川神社 氷川町にありて、植物園の北隣なり。

千歳の松 此松は江戸開府の以前より、巢鴨の深林中に雨露を染め、常盤の色を養ひたる、最も古き大樹なれども、龍姿徒らに秀で、久しく世の知る所とならず、只その高さ十三間に餘り、幹の圍り亦一丈五尺に及びて、赤鱗細甲言ふばかりなく美しきに、鮮苔之に生じ、葛蘿之に懸りて、風の晨月の夕など、高く空中に嘯き立てる其態の、自からに豊なるより、斧斤も之を辱しむるに及はずして、伸びるがまゝ繁るがまゝに任せたりけん、枝葉鬱蒼として假蓋人を宿すに至りしかば、士人等誰いふとなく、之を平松と稱へ、昔時太田道灌の此地を支配せ

る以前より、平松を頼りてその近傍田畑の字となし、御圖帳にも、平松より何町何反何畝と記載して今に至れりといふ、先年六戸子爵は此界限に地を求めんとして、圖らずも此老松を見出し、又それより約五間を距りたる處に、大なる炭竈の築きありて、近傍の樹木は手に任せて伐採せられ、薪炭となさるゝを見て、此老樹も亦早晚一片の烟と化し去らんことを惜み、愛護の念頗りに起りしかば、遂に松の所在地を購入して、此に邸宅を建造し、飽かず朝夕の眺めを樂む程に、土地の者も、亦此老松を巢鴨千歳の松と言慣せりとぞ。

鶴龜の松 此松は小石川區高田老松町細川侯爵邸表門の左右にあり、左手に高く聳えたるを鶴の松と稱へ、右手に稍低く平なるを龜の松と呼ぶ、今其由来を釋ぬるに、昔一橋家の此に邸宅を設けたりし頃、適々三河にありし徳川家康公、二葉の小松二株の、一見尋常に異なるるを見て之を愛し、近侍の者に引かせて、土のまゝ文箱に納め、此松と共に榮へよとて、遙々同邸へ送越せしものなりと言傳ふ、左れば其當時之を文箱の松と命たる由なるが、松は徳川の世に打ちかちて、爾來數百年、曾て緑の色を變へず、其姿さへ一つは鶴に一つは龜に肖たりとて、

後人之を鶴龜の松と言傳へ、地名をも老松町と稱するに至り、洵に目出度事の限りなりとて、其後寛政年間一橋大納言の女紀子が細川侯爵家に嫁したるとき、此邸をば一橋家より細川家に譲りしが、明治維新の後、一度竹内節と云へる人の所有に歸したるを、明治十二年再び細川家に購入し、新館を起して鶴龜の松と相對し、柵欄長に後凋の色を引くとす。

本郷區

湯島天神 湯島天神町に在り、太田道灌靜勝軒にありし頃昔相を夢みしに、翌朝昔公自筆の眞像を携へ來る者あり、依

て直に城外に一祠を建て、之を祭る、乃ち今の湯島天神なり。
根津神社 根津にあり、素盞鳴命を祭る、徳川家宣の産神にして、寛永年間の建立にかかる。

白山神社 白山前町にあり、本郷小石川の境なり、伊弉諾命、伊弉册命、理姫命、泉道守道の三神を祭る、元和年中の建立なり、社内白旗の櫻あり、源義家奥州征伐の折、旗を此木にかけたりといふ、花葉中より、白旗の形したる花瓣出づ。

吉祥寺 駒込にあり、長祿年間太田道灌の建立に成る。
麟祥院 龍岡町に在り、開山は沼川劉

和尙なり、寛永元年二代將軍の命によりて、春日局の菩提所となす、寺號は局の法號より名づく、里俗からたち寺といふは、寺の周圍を枳殼にてめぐらせしによる。

圓乗寺 丸山新町の下にあり、俳優岩井半四郎の建立になる八百屋七の墓あり、七七は天明年間痴情の爲に火刑せられし美人なり。

目赤不動 駒込曙町にあり、伊州赤目山第二世前行和尙の創立なり、其後將軍鷹野の節休憩せられ、目黒目白に對し、目赤となすべしと命ぜられたりといふ。
大觀音 駒込蓬萊町光源寺にあり、和

州長谷寺の觀世音を寫したるなり、丈六の大像にして、貞享年中の建立なり。
榮松院 浄土宗にして増上寺の末寺なり、駒込蓬萊町にあり、寺内名花多し。向ヶ岡 上野公園忍ヶ岡と相對す、武藏野に向ふか岡の草なれば根をたつねてもあはんとそ思ふ」と小野小町の詠ぜるは此處なり。
千駄木林 千駄木にあらず、旗檀木なり、或は往昔此邊に大林あり。一日千駄の薪を伐りしにより名づくともいへど詳ならず。

鷄聲ヶ窪 駒込曙町邊をいふ、昔土井利勝邸の地中に夜々鷄鳴あり、怪みて地

を掘れば金銀の鷄を得たり、故に名づく、或は往昔此邊に遊女あり、故に傾城が窪といひしを、後世鷄聲といひ誤りしなりといへど、引證なし、其曙町の名あるによりも、鷄聲が窪正しかるべし。
五石松 中里の光明山圓勝寺にあり、昔此松五石の領ありしに、其後領米を取上たれば、松忽ち涸蕪す、よりに再び興へければ亦生色ありしといふ。
駒込 在昔日本武尊高所より皇軍を見渡し玉ひ、偕も駒込みたりと宣ひしより、此名あり。

下谷區

上野公園 一名忍が岡と稱す、不忍池

の東に起り、遠く道灌山飛鳥山に連る、寛永年中江戸城の鬼門を守護する爲、京都叡山の延暦寺に倣ひて、慈眼大師寛永寺を建つ、東叡山之れなり、戊辰の變に兵燹に罹り、堂塔伽藍鳥有に歸す。満山櫻花にして、老樹多し、老松の其間に點綴するありて、實に日本第一の公園たるのみならず、世界有数の大公園なり。

徳川氏靈廟 一二の二靈廟に分つ、一の靈廟は三代大猷院四代殿有院十代俊明院十一代文恭院を祀り、二の靈廟は、五代常憲院八代有徳院十三代温恭院を祀る、壯嚴にして人目を眩す、就中三代五代の廟塔は唐銅にして其結構偉大なり、然れ

ども三代公の遺骸は茲に葬らざして、日光山に納葬しあり、構内に五葉松あり、三代公の手栽する所なり。

開山堂 俗に慈眼堂といふ、所謂兩大師なり、屏風阪の上にあリ、慈惠慈眼兩大師を安置す、慈眼大師は徳川家康の歸依僧天海僧正なり。

親王墓地 開山堂の構内にして、寛永寺座主法親王十三代の墓地なり。然れども尊骸を葬りたるは後水尾天皇の皇子守澄法親王、後西院天皇の皇子天眞法親王、東山院天皇の皇子公寛法親王なり。

大佛 精養軒の側にある、釋伽如來の坐像にして、高サ二丈二尺餘、万治年間

木食上人の建立なり。

清水閣 京都清水の舞臺に擬したり、本尊は千手觀音にして、惠心僧都の作なり。

秋色櫻 清水寺の堂後にあり、一株の垂糸櫻倒まに石井の上にかゝる、井の端の櫻浮雲し酒の酔」とは、其角の高弟秋色女が十三才の折の詠なり、故に其雅號を取らして呼ぶ。

彰義隊戦死者墓 山王臺にあり、戊辰の際、幕臣の上野に據りたるもの、雲霞の如き官軍と戦ふて戦死す、其靈を祀る所にして、香華常に絶へず。

五層塔 東照宮大鳥居の内、老杉の間

にあり。

摺鉢山 天神山は其本名なり、摺鉢を伏せたるが如き形なるによりて摺鉢山と呼ぶ、山上櫻樹の早咲多し。

博物館 元の上野法親王御門の裡にある煉瓦造りの宏壯なる建物なり、内國古來の珍器其他博物の標本を陳列せり、博く衆庶の觀覽を繼にす。

動物園 上野清水谷に在り、我邦に産する禽獸蟲魚の外、虎象火食鳥袋鼠四不象駱駝水牛等珍奇なる動物をあつむ、觀覽料一人二錢なり。

閑々亭 これ藤堂高虎の閑居せる所にして、乃動物園の内にあリ、抑も高虎は戦

國時代の雄將にして、始め秀吉に臣事し、後家康に款を通ず、家康の江戸に湖府を開くや、藤堂氏をして此處に第を設けしむ、然るに其地形たる、藤堂氏の領地伊賀の上野に似たるを以て名けたりといふ。パノラマ館 燈臺館といふ、日清戦争旅順陥落の活劇を見せしむ。時の鐘 大佛の前、韻松亭の後にあり「鐘は上野か淺草か」と、これ此鐘をいへるなり。花園稻荷 穴稻荷といふ、石窟の上に詞を建てるを以てなり。内國商品陳列所 博物館の前にあり、第三回内國勸業博覽會の殘品を賣捌くが

爲め設けられたるもの、今勸工場の如くなれり。帝國圖書館 明治五年の創立にして、元聖堂にありたるを此處に移せるなり、内外古今の書籍數百萬部を藏し、衆庶の縦覽に供す。鶯溪 は上野の東北麓にあり、古より鶯の名所たるが故に此名あり。不忍池 上野の西に位す、近江の琵琶湖に擬したるものなり、又小西湖の名あるは、支那の西湖に擬して詩人の呼びしものならん、満池遊を植えて、紅白相交はり、清香人袂を襲ふ、池の周回十二町二十一間。

辨財天 不忍池中の島にあり、竹生島に摸したる靈祠なり。

五條天神 山下町にあり、始め東叡山にありしが、寛永寺草創の際此處に移さる。

下谷天神 南稻荷町廣徳寺前にあり、蒼稻魂命を祭る。

小野照神社 坂本町にあり、小野參議を祭る。

廣徳寺 北稻荷町にあり、大徳寺派の禪寺にして、其門左甚五郎の作なりといふ。

幡隨院 万年町にあり、淨土宗十八壇林の一なり、俠客幡隨院長兵衛は此寺僧

の庇護を蒙れるなり。

感應寺 上野の裏谷中にあり、宗祖日蓮上人の開山にして日長上人の中興なり、元祿年中天台宗となる、境内櫻桃の花に富む。

天王寺 今共同墓地となれり、有名な白木の五層塔あり、昔時は有名な伽藍なりしが、焼失して今塔を餘すのみ。

本行寺 谷中にあり、太田道灌の建立なりとす、庭中道灌斥候塚あり。

笠森稻荷 谷中初音町にあり、有名な稻荷社なり。

根岸の里 上野の東北麓にして鶯溪につづく、元祿の頃關東の鶯は訛多しとて、

京都の露を多く放たれたる以來、此邊の
みには名鳥多しとて雅人の持囀す所た
り。

盛澤 初音町宗行寺の後庭にあり、往
時盛多く、夏の夕は清游を恣まにす。

御行の松 御行の松は根岸の里時雨ヶ
岡不動堂の邊にあり高さ十二間餘、幹の
圍り一丈五尺、亦稀れに見る赤松なり、

古書によるに、此不動堂は弘法大師の創
むる所にして、松は既にその當時より生
繁れりどあり、其後康平五年、源頼義奥
州征伐のとき、此不動堂に祈願を籠め、
治承年中には頼朝文覺上人をして、不動
の尊像を刻ましめ、此所に平家降伏の法

を修せしめしが夫より年所を経て、常州
佐竹の一族島崎左衛門なる者、文覺の作
れる像を石櫃に納め、松の下に埋めしな
ど記せり、兎に角に此御行の松の世をふ
りて、曾ては弘法大師の眺めにも入りけ
ん、頼朝にも文覺にも愛でられけん、實
に珍しき名木といふべし。

淺草區

淺草公園 府下公園中最も繁榮を極む
る所にして、もと淺草寺の境内なりしが、
明治六年三月公園とせられ、自來追々區
域を擴大して、終に全公園を七區に分ち、
庭園を設け、林地を開き、大に風致をま
せり。

仲店 雷門より仁王門に至る兩側の商
家をいふ、都下の婦女少兒の得意場たり。

觀音堂 公園の正面に建てり、伽藍宏
大結構壯麗、本尊は一丈八分の黄金像に
して、推古天皇三十六年、宮戸川より得
たりし靈像なり、孝徳天皇大化九年、勝
水上人一字を建てて之を祀る、後天徳の朝
に至り、慈善大師來りて更に其規模を擴
大す、爾來屢々祝融の災に罹りぬ、今の
伽藍は三代將軍徳川家光の時、之を建築
せるものなり、其拜殿天井の龍、並に内
陣天井の鳳凰、後壁の二十八部衆等は、
狩野永眞の筆にして、拜殿の天井に書け
る天人は、實に狩野洞春の筆に係る、此

天井の龍毎夜飛行害を爲せしを以て、針
を頭部に打て之を止めたりとて、其針今
尙存す。

古繪馬

本堂内に掲ぐ、古法眼元信の
筆と云ひ傳ふ、寛政の初め本堂を修營す
るに當り、狩野某之を影寫せしも、名印
共に煙滅して何人の筆なるやを知り難
し、傳へ云ふ昔此馬毎夜逸して近傍の田
圃を蹂躪す、因て左甚五郎に命し、之に
手綱を附せしめしに、是より後竟に此事
止むと。

靜菴刀

本堂内陣に掛けたり、世に義
經の妾靜の納むる所なりと傳ふれども、
恐らくは靜流の菴刀ならん、或は云ふ菴

刀鍛治志津三郎兼氏の作なるべしと。

雷門 當時南方の總門なりしが、回祿の災に罹り、今は僅に礎跡を存するのみ。

山門 樓上に文殊菩薩の像を安置し、樓下の左右には金剛力士の像を安置せり、淺草寺なる額は曼珠院二品良尙法親王の眞蹟なり。

五重塔 山門を入りて右側にあり、内に五智如來を安置す。

二天門 元と隨身門と唱へしが、維新の際今の名に改む、即馬道に出る所の門なり、元は豊磐間戸命、櫛磐間戸命、の像を安置したりしが、今は之を本堂に移し、

轉輪藏内の四天佛の二軀なる持國天、多門天を茲に移し置く。

轉輪藏 五重塔の傍にあり、一切經を藏す。

蛭子大黒の石像 弘法大師の作にして、淡島社内にあり。

錢瓶辨財天社 五重塔傍なる小丘の上にあり、本尊は慈覺大師の作なり、舊と此丘の周圍は池なりしか、八九年前埋立てたり、此社は相州江の島總州布施と合せて關東の三辨天と稱す、社の傍に鐘樓あり。

釋迦堂 本堂の後にあり、涅槃の木像を安置す。

念佛堂 全所にあり、阿彌陀如來を本尊とす。

閻魔堂 本堂より乾の方にあり、閻魔の像は運慶の作なり云ふ、閻魔堂なる額は朝鮮國眞狂金啓升の筆なり。

錢塚地藏 閻魔堂の傍にあり、地藏尊を安置す。

六角堂 本堂の後にあり地藏尊及び羅漢を安置す。

錢塚辨天 本堂の西淡嶋社の傍らにあり。

淺草神社 本堂の傍にあり、元三社大權現と云ふ、維新の際、淺草神社に改む、土師臣中知及び家人槍熊濱成、武成、三

人の靈を祀り、之に東照宮を合祀す、濱成、武成、は淺草寺本尊を宮戸川より綱せし人なりと傳ふ、元と今の淡島社のある地に東照宮を廟祭しありしに、御城内紅葉山に移したるにより茲に合祭して其祠を存すと云ふ。

淡島明神社 本堂の西の方にあり。

奥山 本堂より西北の方一圓を云ふ、

此邊揚弓店、大弓場、射的場、寫眞師、料理店、茶亭等甚だ多し。

花屋敷 本堂の西方にあり花卉、盆栽、

異獸、珍禽、等あり、園内に奥山閣あり、

此閣は元と本所五ツ目材木商丸山傳右衛門の所有なりしか、明治二十年此に移す

其建築は五層の高樓にして、高さ五丈二尺、材木は概ね唐木を用ひ、結構の美多く見ざる所にして、眺望も亦頗る佳なり、屋上金色の風凰を裝置し、光輝燦然たり。梅林。公園第五區花屋敷の前にあり、花時は清香馥郁として、宛ら仙境に入るの思ひあり。

公園の池。名稱を知らず、巨大なる池にして中の島あり、島中藤花を以て顯はる。

第六區。公園第六區は池に沿へる一帯の地にして、此邊見世物小屋多く雜沓殊に甚だし。

凌雲閣。公園第六區の北隅にあり、煉

瓦造十二層の高樓にして、眺望の快潤なる東都一なり。

日本パノラマ館。第六區にあり、十六角をなせる建物にして、内に征清役中平壤總攻撃の活畫を展覧せしむ。

久米平内石像。仁王門外にありて、瘡を痛む者の願掛する多し。

墓碑。觀音堂の後に散布せり、元寇古碑、山東京傳、宮古路豊後、花塚、新門辰五郎等の碑、芭蕉宋因其角の句碑、及志道軒の墓あり。

鳥越神社。元鳥越町にあり、天見屋命、日本武尊兩神を祭る有名の神社なり。

須賀神社。須賀町にあり、素盞鳴命を祭

る、俗に團子天王と云ふ。

第六天社。淺草橋の北にあり、面足尊、惶根尊の兩神を祭る、第六天は此邊一般の地名となれり。

諏訪神社。諏訪町にあり、信州の諏訪明神を勧請せるものなり。

今戸八幡宮。吉野町にあり、源賴義、賴任貞任を誅し、康平六年八月所願として石清水八幡を勧請し、其後武衛の叛するや、義家所願ありて勝利ありしかば、永保元年修造を加へ、頼朝泰衡退討の時祈請して、建久元年宮社を建立し、寛永十三年徳川氏亦再興せり。

鶯神社。千束村の田圃にあり、毎年十

一月中毎酉の日に祭禮あり、熊手唐辛などを商ふ、昔は此邊鳥賣の市あり、其日には熊手錢等を鬻ぎしを或る商人熊手は物を掻き集むるものなればとて、二ツ三ツ飾物を付けエンヤ物として商ひしより、其後例となり、終に今日の盛觀あるに至ると。

眞崎稻荷。橋場にありて隅田川に臨めり、昔時千葉兼胤此靈珠の加護にて戰場に先登の譽あり、守胤の代に至り、石叢城内の鎮守となせり。

石叢神社。橋場町にあり、内外兩皇太神を祭る、神龜元年九月十一日鎮坐す。

太郎稻荷。光月町にあり、境内樹木鬱

々として晝猶暗し、鳥居の數八十八の多きあり。

東本願寺 淺草公園の西方にあり、境内三十餘の末寺ありて、昔は神田明神社の下にありしを、明歷年中當所に移せりと云ふ。

總泉寺 橋場にあり、曹洞宗の禪林にして、東京三ヶ寺の一院たり、開山は圓叟宗俊和尚となす、千葉家の香花院なり、寺内に風來山人平賀源内の墓あり。

法源寺 同所にあり、無量院と號す、總泉寺の南隣なり、齋藤別當實盛の墓あり。

長昌寺 法源寺の南隣にして、日蓮宗

の古跡なり、開山は日寂上人にて、身延山に屬せり、當時新鐸の鐘銘に「此地元隅田川に接す、偶々水難に罹りて、堂塔漂流亦沈没す、其所を鐘が淵と云ふ、終に元享元年辛酉寺を今の地に移す」とあり。

本能寺 金龍山山の宿にあり、昔此山より金の龍を堀出せしにより、金龍山の名ありと、眞に風光明媚なり、本尊の聖天尊は齋藤別當實盛の信仰せしものなりしと、今より千四十年前天安元年の建立なり、山を待乳山と云ふ、紫一本の著者戸田茂睡の墓あり。

海禪寺 大雄山と稱す、淺草區新寺町

にあり平將門創立せしものなりと云ふ。榎寺 黒船町にあり、淨土宗にして寺内火除不動尊あり、此寺の近傍數々大火ありしか、いつも火災に罹りし事なしと云ふ。

駒形堂 駒形渡し場の上にあり、本尊は馬頭觀世音なり、在昔人々馬の形を作り、諸願を祈れり、堂内駒の形にて滿されたるにより、世俗之を駒形堂と稱するに至りしと云ふ、建立は天慶五年壬寅の年なり、元來此地は淺草觀音の始めて水中より出でたる所にして、始めて其像を安置したる大石尙存す。

關魔堂 藏前に在り、本尊の關魔王、

一丈六尺及三途川老婆長六尺は、運慶の作なり、又寺内に化馬地藏あり、聖徳太子の作と云ふ。

甚内橋 鳥越神社の前にある小橋なり、寛文の頃強賊向坂甚内疵を疾み、爲に官に捕はれ此橋にて斬らる。

浮島 鳥越八丁四方の名なり、古來如何なる洪水にも、此邊害を蒙る事なし。

首尾の松 大藏省米廩の裏にして、川に面してさしかゝれる松なり、今は僅かに僅斗り残れり。

並木町 雷門前の繁榮なる市街なれど、古へは松並木にして、吉原通に有名なる所なり。

馬道 雷門の横より吉原へ通ずる街路にして、元吉原へ通ずる者、馬に乗つて行きたりしより此名あり。

日本堤 馬道の外れより箕の輪へ續く入丁の堤なり。

孔雀長屋 田町の末日本堤の下にあり、長屋の後に古原と云ふ美觀あれば、孔雀の尾の美しきに譬へしなり。

髪洗ひ橋 日本堤の北にある、小流に架せり、昔遊女の此處にて髪を洗ひたりといふは非なり、此邊元座紙を漉く者多く、其紙を洗ひしより此名あり、故に髪を紙と書く方正しかるべし。

姥ヶ池 淺草田圃山の宿の裏妙音院の

原にあり、但言にいふ、昔此邊人家稀少にして野草花々たる所、一軒の昔の家あり、老婆と娘と住みたりしが、老婆殘忍にして、旅人の途に迷ふて至る毎に、石の枕を貸し與へ、其眠れるを俟ちて、天井より大石を落し、旅人を殺して其衣裳路銀を奪ひしが、娘之を歎き、屢々諫むれども従はず、一夜旅人あり、娘之に危難を救へて避けしめ、已れ代つて枕す、老婆之を知らず、夜半之を殺し、始めて前非を悔ひて此池に投身して死すといふ、武藏には霞の關や一ツ家の石の枕や野寺あるてふと、白河院の御製あり。

淺茅が原 山の宿より總泉寺に至る一

帯の地を云ふ。

鏡が池 淺茅が原の北隅、總泉寺の門前にあり、昔梅若丸の母妙龜此池を見るに、梅若の影池中に映れり、乃ち身を此處に投せしと云ふ、今は埋れて原となりたれど池中の嶋は丘となりて妙龜の塚あり。

駒洗川 橋場の小溝なり、古名を思川といふ、源順朝の馬を洗ひし所なりと傳ふ、宗祇回國記にも「うき旅のみちに流る、思川涙の抽や水のみなかみ」とあるは此川ならん。

首塚 總泉寺の裏畑の中にあり、隅田川合戦の時の首塚なりと、俗誤て蛇塚と

云、蛇塚は別に淺草寺の後田の中にあリ、昔一老樹ありて蛇多かりしと云ふ。

新町 橋場西の裏通り、今の龜岡町にして、昔は穢多村なり、天正の頃までは、日本橋の室町邊にあり、家康入國の後、今の所に移す、明治維新の後穢多をして平民の籍に編するの恩典ありてより、出て、他の市街に移轉せしもの多けれど、尙ほ同所に残りて太鼓靴等を造るもの多し。

高尾が紅葉 山谷橋の側世俗道哲と云ふ寺にあり、新吉原三浦屋の妓二代高尾の墓あり、墓の裏に此紅葉あり。

齋藤實盛の墓 橋場法源寺にありて、

塔には壽永二癸卯五月と刻めり。
鎌倉権五郎景政の碑 同寺にありて、
五輪塔なり、延久二庚戌十月二十三日と
刻す。
標茅ヶ原 橋場の後玉姫稻荷の邊をい
ふ、此邊水鶏の名所なり。
駿馬の塚 今戸町十五番地先にあり、
康平年間源義家東征の砌、最愛の駿馬青
海原、偶ま此處に斃死す、乃ち塚を築い
て葬るといふ。
橋場 治承四年九月十一日、頼朝隅田
川を越へ、下總より武藏の國へ入る、時
に洪水岸を浸し徒歩し乗たれば、江戸太
郎重長に命じて、般橋を架したるより、

此名起れり。
石濱城趾 橋場町石濱神社の邊なり、
昔時千葉家の居城たり。
吾妻橋 花川戸より本所瓦町にかゝ
る、宏壯なる鉄橋にして、長さ八十間一
尺、幅七間四尺。
厩橋 黒船町より、本所外手町に架す、
長さ八十四間、幅七間三尺、ヲチス形の
鉄桁を用ふ。
本所區
牛島神社 須崎町にあり、素盞鳥尊及
清和天皇の皇子を合祀せるものにして、
境内亦勝地なり。
三圍稻荷 小梅町にあり、社内には元

祿の頃寶齊其角雨乞の句ある石碑あり、其角堂は近年の建築なれども、池に臨みて風致あり、傳へ云ふ、元祿の頃境内に老嫗あり、參詣の徒供物を捧ぐる毎に、此老嫗田の面に向ひて手を拍ては、一つの狐何處よりか來りて、之を食ふを常とせり、後老嫗世を去りければ、狐も亦絶て出てす、其角の句に「早稻酒やきつぬよび出す姥かもち」とあるを見て知るべし。
秋葉神社 請地町にあり、千代世稻荷を祭る、正應年間の創立なり、境内芝原廣く運動場に適せり、花期は殊に都門の老若群集す。

法恩寺 太平町にあり、日蓮宗にして長録年間の創立なり、太田道灌其男源六郎の早世を悲しみ、爲めに此寺を建立す、源六郎法名を法恩といふ、故に名づく、昔は江戸城中平河口にあり、其後柳原に移し谷中に移し、終に此地に移さる。
長命寺 遍照院と號す、向島牛御前の裏にあり、天台宗なり、在昔は聊かの庵室なりしか、寛永年間將軍遊獵の時不豫なりしかば、此寺に休まれ、庭前の井水を以て服藥せられしかば、須臾にして快復せしにより、此井に長命水の名を賜はり、寺號を改むべき旨命ありし故に、長命寺と號す、文人雅客の石碑多し、此邊櫻餅

の名物なり、此寺墨堤に接し、風景絶佳、殊に雪の旦杖を曳くの雅客多く、芭蕉翁雪見の舊地とて、今に境内に芭蕉庵なるものあり、亦芭蕉雪見の碑及十返舎一九の碑あり。

弘福寺 向島牛御前の東隣にあり、黄葉宗の禪室にして、洛陽萬福寺を模擬す、開山は鏡牛和尚なり、殿堂に額及聯等多く掲げり、過半鏡牛和尚の筆なり。

回向院 兩國橋の東にあり、當院は明暦丁酉正月十八十九兩日の火災にて死亡せし十一万七千餘人の亡魂を吊せん爲めに明暦三年創立せしものなり、其後安政の大地震の死亡者も同じく葬れり、寺中

鼠小僧の墓あり。

羅漢寺 緑町にあり、昔は黄葉宗の大刹にして、本所五ツ目にあり、螺堂と稱して有名なりしが、堂宇破壊し後當所に新築す、五百羅漢あり、坐像二尺五寸にして、皆生るが如し、此寺の讀經は支那音を用ふ。

長慶寺 彌勒寺橋の南にあり、芭蕉、其角、嵐雪の墓、又義太夫節元祖々太夫の墓あり、年忌には義太夫の奉納會あり。多田藥師堂 馬場町東江寺にあり、多田滿仲の念持佛なりしにより終に名づく。

彌勒寺 林町にあり、眞言宗の寺なり、

本尊は藥師如來にして元和元年の建立なり。

縛られ地蔵尊 業平町北側にあり、願望あるものは本尊を縛し、成就すれば之を解くの習ひあり。

安宅町 兩國橋と新大橋の間に安宅丸の事跡ありたるに依り、此町名あり、安宅丸は元小田原北條家の軍船にて樟木にて造り、金銀珠玉を嵌め、長サ三十八間、胴の間十八九間の美艦なり、寛永十年元祖猿蓑勘三郎に金座を下し、音頭にて江戸港に廻し、同十二年將軍上覽あり、其後天和年中故ありて取毀てり、劇場に於て黄門肥と唱へ演ずる事あり、人の皆知

る所なり。

婿しの森 大川端にある大椎の一株なり、元松浦家の屋敷なれば之を椎の木松浦と云ふ、山谷舟此木を見て婿しと云ふより此名あり、今は安田善次郎氏の邸弟となれり。

駒止石 婿の森の南一丁許先にある丸石なり、八幡太郎義家東征の際、駒逸して此處に止まりしといふ。

吉良屋敷 今は町家となれり、これ吉良上野介の邸弟四十七士が討人の古跡なり。

義士齋麥 回向院の南大通なる楠屋といふ齋麥屋なり、赤穂義士等が討入の時、

此處にて齋麥を喫したりとて、今も尙大石良雄が持來しといふ一升徳利を存す。神泉の松 扇橋の東にあり、此邊に釜屋鍋屋の大家あり。

深川區

富岡八幡 深川公園にありて、應神天皇を祭る。

成田不動 八幡宮と相隣る、成田不動尊の分身なり。

深川公園 明治六年公園となる、園内梅櫻山吹等あり、又泉水ありて汐入りなり、風致頗る佳し。

靈岸寺 十八椋林の一にして、寛永四年の創立なり。

洲崎神社 洲崎町にあり本尊は天女にして弘法大師の作なり、維新後本尊は芝公園に移し今神社となる、

郡部

新田神社 荏原郡矢口村にあり、新田義興並に従士十騎を祭る、毎年十月十日祭禮あり。

御殿山 荏原郡品川町の西にあり、元太田道灌の住第たり、櫻の名所にして南方の仙境たり。

荒蘭崎 鈴が森の磯にして、「草かけのあらぬ崎の笠島を見つゝや君が山路こゆるらん」と万葉集に見えたるは此處なり。寄木明神 荏原郡洲崎にあり、日本武

尊、橘媛を合祭したる所なり、又此地を兜島といふは、義家東園發向の時、漁人に神傳を開きて勝利の事を祈り、歸途再び詣りて咒を收めしか故なりと。

羽田神社 同羽田村に在り、辨財天の祠にして境内頗る勝地なり。

東海寺 品川硝子製造會社の後にあり、寛永十五年建立したる臨濟宗の古刹なり、開山澤庵和尚の善知識なる事は世人の既に知る所なり、香の物澤庵遺は此和尚の發明なりといふ、又和尚の墓は大なる石三個を疊たるのみにて、彫付たる一の文字なし、恰も澤庵遺の壓石の如し。海晏寺 品川宿歐洲にあり、當山紅葉

の名所にて秋色無双なり、本尊は饒頭觀音なり、初め後深草天皇建長三年、當寺門前の海中より大なる鯨を得しに、其腸中より正觀世音出しにより、鎌倉に訴へしかば、以て希代の事となし、之れ天下泰平の瑞ならんと、終に海晏寺と名つけしめ、觀音を以て本尊となす、明治の元勳岩倉右府の墓あり、有名の寺院なり。

目黒不動 荏原郡目黒村にあり、本尊は慈覺大師の作なり、或は曰ふ此所元と日本武尊を祭りしを、土人稱して荒神と唱へたり、後大師回國の時、土人其故を語り、尊の像を彫らん事を請ふ、大師即ち此像を刻り、蓋し尊曾て草賊の欺く

所となり、狩に出たるに、賊火を放せしかは、尊右手に劔を揮ひ、左手に狩犬の綱を持ち、炎々たる火中に立ち賜へる所を彫刻せしものなりと云ふ、此地は笈の名所なり、又料理店數軒あり、皆牡丹の古木を以て名あり、社内獨鈷の瀧あり、大早にても枯るゝ事なし、此邊古木鬱々として夏季最もよし。

水月觀音 南品川海照山品川寺にあり、弘法大師の持佛なり、本像は海中より出現せしめもの、よしにて來歴最も多し。

祐天寺 荏原郡中目黒村にあり、寛永三年、祐天上人の開山に係る、本尊阿彌

陀如來は長サ一尺五寸許惠心僧都の作にして、祐天生涯の持念佛なり、又祐天八十二歳の影像は三輪利鑑の作なり、其他寶藏せるものは蜀江錦、九條袈裟、カサ子女の濟度如法衣等あり。

淨真寺 同奥澤村にあり、延寶六年珂碩和尚の開基にして、寺中上品堂(上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生)三品の阿彌陀あり、上品堂(上品上生、上品中生、上品下生)以上九體の如來を安置す、各々坐像にして一丈六尺あり、又佛像一軀毎に圓光ありて、附する所の小佛各一軀に一千十一軀宛あり、何れも珂碩上人の作にて、上人常に一日三錢宛を貯へ、造佛の費に充つ、寛

文四年より同七年に至り、四年間を以て悉く成就せりと、又寶物には芝枯大名號(長十三間山九尺白布十反を以て造れる一幅にして草木國土普な成佛の念を寫せるもの)接待大茶釜等あり。

本門寺 大國院を號す、同池上村にあり、日蓮大師弘法の大本寺にして、甲州身延總州中山と共に三頭と稱する一員なり、當寺は日蓮大師終焉の古跡にて、弘安年間の開創たり、則宗祖大師を以て開山祖とす、境内堂塔墳墓舊跡等多し、坊舎は三十三宇、惣門の額本門寺は光悅の筆なり、光祖日蓮大師の遺物親筆等亦多く藏せり。

井頭辨天社 豊多摩郡井の頭池の中島

にあり、建久八年源頼朝の建立なりといふ、像は傳教大師の作なり。

大宮八幡宮 同和田村にあり、和田八幡といふ、祭神は應神天皇にして多田滿仲の勸請なり、源頼義康平六年奥州より凱陣の時宮を修し、源家の守護神とす、故に頼朝鶴ヶ岡に等しく重修せられしか、降て足利の世に至り、上杉北條相争ふのとき兵火にかゝりしを以て、悉く灰燼となり、繼に神跡を残せしが、天正十八年家康新に神領を附せしと云ふ。

十二所の社 淀橋の南、角筈村にあり、祭神は紀州熊野神社に同じ、其初めは應永の頃鈴木某紀州より居を移し、産神を

勸請したるなりといふ、瀧あり、俗誤りて十二、その瀧と云ふ。

澁谷八幡宮 同中澁谷村にあり、神体は弘法大師の作、應神天皇の尊容なり。道玄坂 澁谷より世田ヶ谷へ行く道なり、昔和田義盛の一族此邊の岩窟に隠れしと云ふ。

朝霧ヶ瀧 澁谷にあり、昔此里に澁谷宗順と云ふ長者あり、撫子姫と云ふ娘を持てり、容貌すくれて美なり、或年の春父母と共に圓燈寺に花を観る、寺に可憐あり、朝霧といふ、姫を戀ふ、然れども終に其意を達せざるを怨み、此瀧に投して死したり、因て朝霧が瀧と云ひ、其後

又寺僧瀧の側に岡を築きてかふる塚と云ふ。

金王櫻 澁谷八幡の境内にあり、久壽年中源義朝鎌倉龜ヶ谷の館に植られしを、金王丸に賜ふ、全王丸は領地澁谷に持來り、八幡社内植えしと云ふ、又其西に金王丸誕生の地あり。

金王丸城趾 八幡宮の西なり、古井多し、澁谷代々の城跡なり。

玉池 玉池とは地名なり、天文の頃旱魃して河水の流断ゆれども、此所の一井のみは、水常に多し、會婦あり、水を汲むに釣瓶中に一の精玉を得たり、速に之を八幡社に納む、從來玉の井と云ひしを

如何なる譯にや玉池と呼て所の名となせり。

斥候の塚 大久保百人町にあり、金王丸斥候の塚なりしと、昔は方二十間もあり高さ丈餘のものなりしと、又其元に鎌倉時代の古道ありしといふ。

桃園 中野村の先より方二三里の間、田畑の間に皆桃を植えたり、花の頃は美觀にして一村悉く紅繡を飄すが如く、實に好風景なり。

鞍掛松 中野の先代々木野の原にあり、正保二年五月、源義家武衛征伐の時、馬を此松に繫ぎ、鞍を其枝に懸けしよりの名なり。

武藏野 中野より向ふ府中邊を云ふ、西行法師の歌に「どにかくに霞はこほれむさし野のくさむらことにむす秋風」とあり、皆人の知る所なり。

逃水 武藏野の原にあり、向ひに水ありと思ひ、其所に至れば、又先にあり、至れば又逃げ、終に水を見る能はず、故に名づく、之れは眞の水にあらず、春の頃若草茂れる時、風の爲めにうね／＼なせるが、恰かも水の如くに見えしなり、故に冬は此事なし、俊賴朝臣の歌に「あづま路にありといふなる逃水の逃かくれども世を過すかな」とあり。

井の頭池 中野大盛寺にあり、辨財天

の社あり、此池神田上水の源にて、池の周囲柳多く、水色緑にして大旱の年と雖とも潤る、事なし、此池七所の口より水涌出す、故に七井の池とも云ふ、慶長十一年將軍參詣の節、池水にて茶を立てさせられ、其後茶臼と辛夷の木に井の頭と書れたる額面とを寄進せりと、維新後近傍の山林を亂伐せるより、大に水量を減したりといふ。

三河島 北豊島郡日暮里の東にあり、徳川家康入國の後、小臣者の子孫三河の田地を捨て、江戸に來り、奉公を願ふ者には、之に居らしむ、因りて此名あり、濱菜の名産あり、練馬の大根と厨下の龍

を競ふ。

蛸殻山 三河島にありて小さき山なり、悉く蛸殻より成れり、昔は此邊入江なりしが爲なりと。

梶原塚 同日暮里王子村の間、平塚明神の裏、田の中に二株の古松ある所なり、此所梶原の邸宅の跡なりといふ。

岩屋辨天 岩屋は前に王子の川を受け、小瀧あり、高さ一丈餘名づけて不動の瀧と云ふ。

狐火 王子稻荷の邊、田畑の所、毎年舊曆十二月晦日の夜此火を見ると云ふ、其時限定まらず、或は宵或は曉、凡そ一時間程見ゆると、之を見んとて諸方より

好事家來り一夜の宿を取るもの多しといふ。

高田馬場 北豊島郡にあり、赤穂四十七義士の一人堀部安兵衛復讐の地にして、昔源頼朝隅田川合戦に勢揃せしも此地なり。寛永十三年馬場を築き馬調練の所とす、北方に老松あるは當時植たるものなり。

山吹の里 高田より北砂利採り場の邊なり、太田道灌遊獵の時雨に遇ひ、蓑を小女に求めし古跡なり。

豊島泰景の城跡 石神井村三寶寺池の傍なり、文明年中泰景の居城なりと傳ふ、空齋今猶存せり。

石神井村の名稱 往昔井を穿つとき土中より石を掘出せり、其石古代の石劍と云ふものに似たり、故に此名を止む、其石劍今尙石神井明神にありと云ふ。

道灌山 日暮里にあり太田道灌出城の跡と云ふ、此所眺望よし、又其山南の入口に大木の松二株あり、道灌の船繫松と云ふて有名なり。

吾妻森 南葛飾郡にあり、臥龍梅より小流を越え、數町の外なり、當所花立姫の廟なり。

代々木野八幡宮 代々木村にあり、建曆二年九月二十三日、源頼朝の家人荒井外記智明鶴ヶ岡八幡宮を勸請せしなり。

鷲森神社 後冷泉天皇の朝、源頼義東征凱旋の時白旗を祀りしものなりといふ。
 妙法寺 堀の内村にあり、日蓮宗一致派にして、其先は碑文谷村にありしを、元祿の頃當所に移せり。
 桃園觀音堂 中野高圓寺にあり、祭神は恵心僧都の作なり、此邊桃樹多し故に桃堂ともいふ。
 平塚神社 北豊島郡平塚村にあり、往古八幡太郎源義家前後十三年の戦凱陣の時、此地に逗留し、城主豊島太郎義近に銀一領及十一面觀世音を與ふ、其後元永年中豊島氏城中清淨の地を擇んで彼の鐘

を塚に收め、城の鎮守とす、且社を營みて三連枝の像を安す、之を平塚の三明神といふ。
 王子神社 北豊島郡王子村にあり、熊野三社を勧請す、文龜元年の建立にして境内頗る風致に富む。
 王子稻荷 同王子村にあり、境内幽邃にして夏季の消暑に最も適せり。
 鬼子母神 同雜司ヶ谷法明寺境内にあり、正應二年の建立にして都下に於て最も參詣多き鬼子母神なり、此所風景好く且其前には掛茶屋あり、蕎麥切の名物なり、一説に此本尊は楠公息女の守り本尊なりしと。

瀧不動 同王子瀧の川の東二丁餘にあり、弘治年中和州龍門の學仙坊不動の法を修する數年なりしが、或時夢を得て此所に來り、瀧のありたるを見て、其傍に庵を結び不動法を修せり、其年の秋洪水にて此側の川水溢れたる時、水中に光ありければ、水の減するを待て求めたるに、不動を得たりと、依て此所に安置したるものなりといふ。
 西福寺 豊島村にあり、行基菩薩の開基にて、豊島權頭清元の建立なり、當時は六阿彌陀の一番たり、俗に元木の如來といふ。
 鷲神社 南足立郡花又村にあり、祭神

詳ならず世俗呼んで大鳥といふ。
 總持寺 同西新井村にあり、眞言宗にして遍照院と號す、弘法大師の草創にして、本尊弘法大師の靈像も同じ作なり、毎月廿一日に開帳ありて參詣頗る多し、西新井の大師と云ふ。
 龜戸天満宮 南葛飾郡龜戸村にあり、筑前大宰府の移しなり、寛永三年の建立にして殿堂樓門共に宏大にして、頗る古代の風あり、又境内の古池に架するに大鼓橋を以てす、其形、大鼓に似たるを以て其名あり、池畔には藤多く掛り、其總丈三尺に垂んとす、頗る美觀なり、其境内風致に富むを以て、騷人墨客杖を曳く者

多し。

白髭神社 隅田堤寺島村にあり、後田彦命を祀る、天曆五年慈惠大師關東下向の時、靈示あり、近江の滋賀より此地に勧請せしなり。

平井の聖天宮 同平井村にある古社なり。

木母寺 向島堤上櫻花盛るの所にあり、騷人墨客杖を曳く者多し、境内梅若丸の墓あり、寺中には梅若丸の扇あり、其骨象牙にして古風なるものなり、又梅若丸の母妙龜尼の畫像あり、何れも常寺の寶物なり、毎年三月十五日を以て梅若丸の忌日とす此日、雨降る時は、里人之れを

梅若の涙雨と云ふ。

帝釋天 南葛飾郡柴又村題繼寺にあり、境内甘味の大泉井あり、諸人之を靈水と云ふ、庚申の日都人參詣群集す。

木下川藥師堂 同木下川村に在り、本尊は弘法大師の作にして、千葉介常胤信仰の佛尊なり。

第七十六 花月の楽

一月

一陽來復、年茲に改まりて、昨日の鬼も禮に來る、屠蘇の香は、青疊の匂ひこぼれて、誰か後に近き大晦日を思はんや、其元日の初日の出を拜し、一年中の吉事を

迎へんとするは、我東京商人藝人等の慣習なり、其場所としては

湯島天神 神田明神 九段 阪

愛宕山 霞ヶ關 上野山王臺

高 輪 洲 崎 日 暮 里

等にして、雪見に最も好風景なるは、

待乳山 日暮里 江戸見阪

九段 阪 御茶の水 目 黒

上 野 目 白 登 隅 田 堤

品 川 市谷八幡 池之端

なり、いづれも其味を味ふは、向島の堤にして、花かと疑ふ櫻の梢、月かど怪しむ三圍須崎の銀世界、遠く白梅梅若の邊にいたれば、雪愈々深くして、景愈

々濃なり、東京人士の豪傑なる、雪見船の置炬燵、酒を呼び妓を載せて、隅田川に泛ぶ者も又少なからず。

二月

月か月にあらず、雪か雪にあらず、正に是れ羅浮山下の道とは唐人の詩にや賦しけん、我國の梅の花とは宗任が風雅なり、氷肌玉骨の匂ひ體郁として、訪ひ來る人の袂にこぼるゝ、其花の兄なる梅の花は、二月の中旬より咲き始む、方今梅林として有名なるは。

- 龜井戸 木下川 淺草公園
- 杉 田 百花園 深川公園
- 小向井角 善 靖國神社

原 村 靖地梅林 芝丸山
目 黒 巢鴨梅林 小村井
八景園

等なりとす、されども東京人士の戶外遊
山を喜ぶより、小梅林は市の内外到る處
としてあらざるなし、暗香浮揚して漫に
情を牽くは、此二月好和の天地なりと
す。

三 月

彼岸櫻は此月の中旬より咲き始む、駘蕩
たる春色はそよ吹く風に綻びて、蝶も寐
よげに見るなり。

上野公園 傳 通院 日暮里
綾 瀬 谷中經王寺 靖國神社

青柳の糸の亂れのやさしきは

綾 瀬 不忍池
等にして、菜の花の黄金をしける如きは。

三河島 日暮里 道灌山
隅田村 目 黒 王子

中里村 廣 尾 巢 鴨

此月は近在にも都人士のをとづれあり
て、日頃は荒き風にも當てじとする娘子
供をさへ、摘草とあらば、親から先へ、
嬉し喜びて出づるなり。

四 月

八重一重、花も臙の薄化粧、棚曳く春の
匂やかなる、一目千本の目ざましきは、
四月の櫻の眺めなり、散りてこそ花も櫻

と惜しまるれとは、武士の潔よき日本魂
を詠じたるものにして、花七日を命とし
て、風に狂亂の名残を止むるは、誠にこ
れ東京氣質の潔よきを示すものにして、
櫻の花は江戸兒の氣質を代表するものと
ふふえし。其遊覽の場所としては。

上野公園 御殿山 深川公園
黒田堤 向ヶ岡 飛鳥山
白山 星ヶ岡 小金井
根 津 溜 池 青 山
澁 谷 日暮星 染井村
芝山内 靖國神社 市ヶ谷門邊
綾 瀬 千住堤 清水谷
等にして、桃の花のめでたきは。

四谷十二社 中 野 大 澤
六 郷 羽 田 松伏村
靖國神社 越ヶ谷 巢 鴨
等なり、櫻草は

染井村 板 橋 目 黒
川 口 廣 尾 四ッ木

なり、分けて川口の原の如きは、芽出せ
る草の末葉の間より、人知らじと笑みか
たひける風情心憎き迄に優しかり。

沙千は此月にして、舊曆三月三日を大沙
と唱ふ、此日は内海遠く干瀉となりて、
婦女子と雖も危険なし。

洲 崎 品川 沖 芝 濱
越中島 大 森 高 輪

等の海濱に、紅裙のひるがへるを見る、
こも又東京人士が奢態の一つなり。

五月

藤影長サ六尺、水に臨みて悠々たるにあ
らざれば、松にからみて媚々たり、紫の
色の朱を奪へど然も誇らず、白きは君子
の心に似て、櫻の如く咲き誇らねば辰し
からず、枝垂勝の面羞げなるは優しき乙
女の姿に似たり。

龜井戸天神 大塚傳好院 木母寺境内
淺草公園 目 黒 上野公園

等名花少なからず、就中龜井戸は古より
麗花を以て顯はるゝ名所たり。
此月は又富貴を誇る牡丹花の、豪壯目を

驚かすに堪たるものあり。

團子坂 本所草文寺 島村
淺草花屋敷 染 井傳 中

目 白笑花園 目 黒
大久保 四ッ木池 上

等の豪麗師が庭に就けば、豊富なる嬌態
の時を得顔なる、目も覺ゆる斗りに目さ
ましかり。

躑躅の花の、紅白黄紫、様々の色香を街
ふは。

靖國神社 染 井日暮里
大久保 根津權現 護國寺

等なり、芍藥は美人の立姿にぞ譬へらる、
牡丹に似て然も優しく、薔薇の如くなれ

ど、思はしき木針もなし、管はい美しき
女の、浴を出でて風を迎ふるにも似たら
んかし。

本所借工園 大久保 寺嶋村
百花園 靖國神社 笑花園

等は芍藥を以て名高し。
六 月

杜若は菖蒲に似て小さく、姿も又一入し
はらしきぞ、中々に愛らしかる。

根 津秋 葉 新梅屋敷
木下川 四ッ木

等は杜若の名所なり。
菖蒲は古來江戸の名花にして、他地方に
卓絶して、幾千万種の異り花、各が自々

妍を戦はずは、三千の宮女が君寵を争ふ
にも似たらんか。

堀切村 百花園 小松島
四ッ木 廣尾笑花園 本所草文

等は花菖蒲を以て聞ゆ、分けて堀切四ッ
木の途は、此頃日和麗かなれば、遊山の人
を以て肩摩殺撃すと言はまし。

七月

願ひの糸の空に満ちて、星に供ふる乞巧
奠、糸いろくの竹の花と詠まれしも此

月の七夕をいふなり、じき玉菊の来る夜
半は、十三日より盃盃盆なり、此月は暑

き烈しければ、流石東京の豪奢を誇る人
士も、花を追ふ者どもなし、されど朝

霧未だ露れやらぬに、日出る迄の命ぞと、
不忍池の道の匂ひを聴き、朝涼の肌に通
る上野山を陰えて、入谷の薙師が許に
牽牛花を訪ふも一興なり。

丸 新入 十 其外數十軒

の牽牛花屋が引きも切らぬ客足は、四方
より此處に落來りて、朝の間の賑かさは
譬へん方なし。

八月

炎帝猛威を逞しうして、燦日金をも熔か
す、此月は花を賞すに禁なけれど、納涼
の樂しきは、花に拵れるの妙趣あらん、
瀧に打たれんとならば。

王 子道 瀧山目 黒

十二社 切支丹阪
涼を容れんとならば。

芝山内上 野星夕岡
神田明神 向島水神

等、此炎塵の中にありて、涼風の徐ろに
暖ふなり、此月に舊曆七月廿六夜あり、
東京人士が所謂二十六夜待にして、夜を
こめて三尊の彌陀佛を拜せんとして。

中 洲待 乳山上 野

神田明神 湯島天神 愛宕山
高 輪 御殿山 品川
凌雲閣 八景園 日暮里

等に至る者引も切らず。兩國の川開き
は大抵此月の二十日前後にして、一雨の

烟火間もなき光りかなとは、此騎容の豪
舉を詠みたるなり。

九月

春は花の眺めに飽けども、秋は七草の優
し氣なる緋襪として露備氣なる風情は、
如何に都人の心をか動かしたる。

向島百花園 廣尾笑花園 植文

養花園 龜戸菘寺 根岸蘆深園
等は、文人墨客の秋を率く者多く、近來
歌妓の類を携つて來り遊ぶ貴公子多き

は、花心あらば何とや言はん。

唧々たる虫の音に秋ふけて、露に咽べる
鳴音を訪はんとならば。

道瀧山廣 尾駒場野

飛鳥山日暮里根岸
向島綾瀬中川堤
ぞよろしかる。

陰曆中秋の月、皎々として飛鏡の丹闕に
臨むが如きは、正に此月の良夜にあり、
芝丸山上野山王塚、孰れとして名月の架
ならざるはなけれど、細波艇に碎けて、

銀蛇の走るが如くなるに、一葉の扁舟に

棹さすは、風流中の風流なり、名月や池
をめぐりて夜もすがらとは、芭蕉が水と
と月の契久しきを詠みたりけん。

隅田川中川芝濱
品川大森高輪

等、月は、異ならねども、眺は同じからず。

十月

花の隠逸なるものは、齡を延ぶると古人の菊に焦れしも心憎し。

圃子 坂 淺草花屋敷 染 井

目 黒 笑 花 園 本所草文

百花 園池 上大久保

にして、紅於二月花は紅楓の錦織出す眺なり、紅葉に教へたる酒の烟は、俗に似て反つて雅なるも、此木の隠徳なるべし。

瀧野 川 海 晏 寺 上 野

目 黒 秋 葉 大 久 保

千駄ヶ谷 高 田

等、満目荒涼たるに、霜に酔ふて誇り顔なるもいとをかし。

十一月

は花に乏し、菊と紅葉の十月より一際狂へるより外は、霜枯の野面に、嫁菜の年老ひて、白き花の衰れに色褪せたるも寂しかり、此月は東京の名物なる酉の市の、沈みたる人の心を煽るぞ、中々に目覺しかりける。

淺草田甫 四谷須賀町 品川天王

目 黒 深川八幡 内藤新宿

など、酉の市の名高きものなり。

十二月

一歳の未なれば、人の心も押詰りて、流石豪遊を喜ぶ人士も、游山にくらす日とてもなし、本所四ツ目などの冬牡丹、山

茶花などの人慕かし氣なるなきにあらねど、轍の之に向つて走らば希なり、年の市は一頃は頼りたりといへど、今は年々歳々榮へ行くのみにて、松飾羽子枚賣る店の夜をこめて店飾りするなど譬はい消えなんとする燈の、最期の光りの輝く如く、暮れ行く年の名残とぞ知られたる。

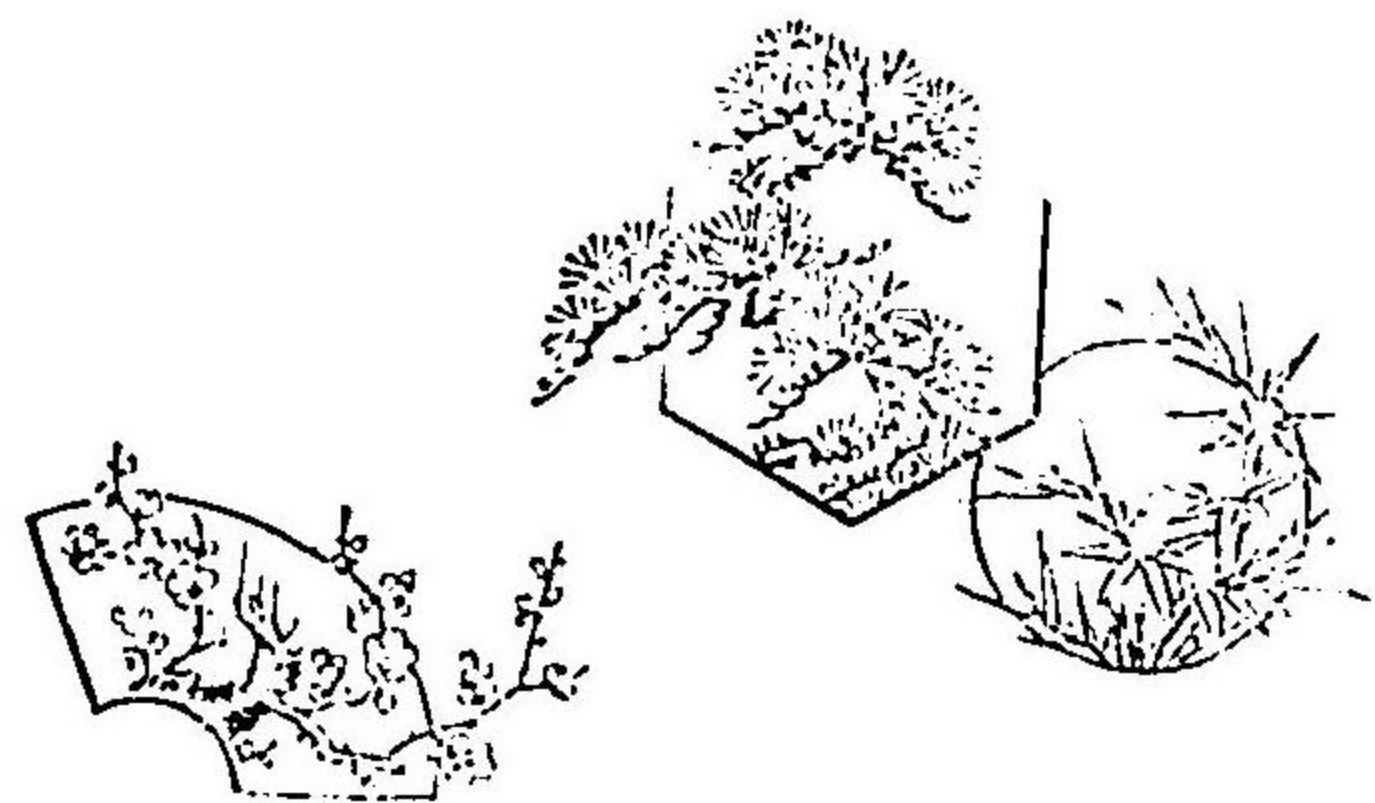
深川八幡 淺草觀音 芝神明

神田明神 愛宕神社 平川天神

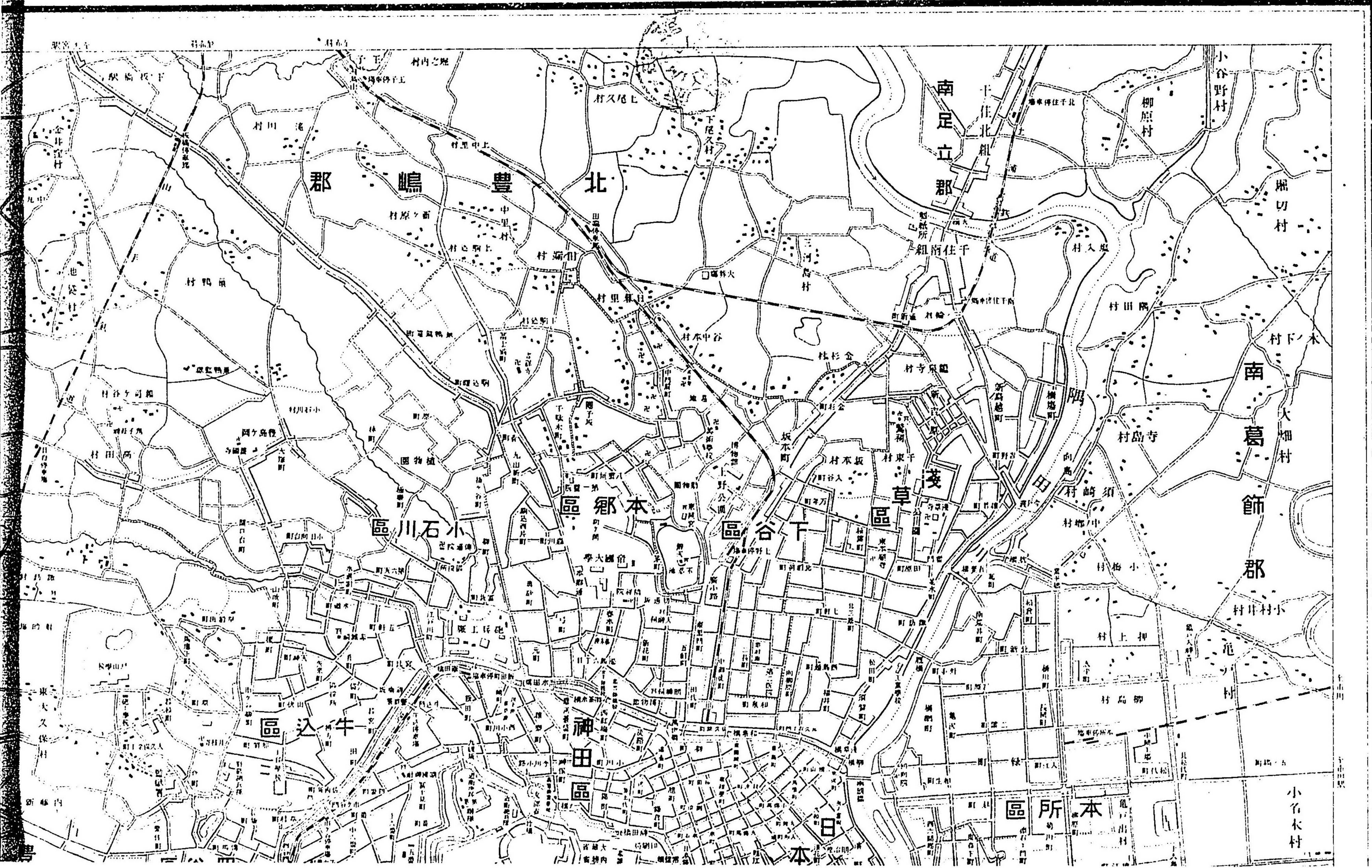
は古へより六太市と呼ばれ、其外

湯島天神 兩國藥研堀

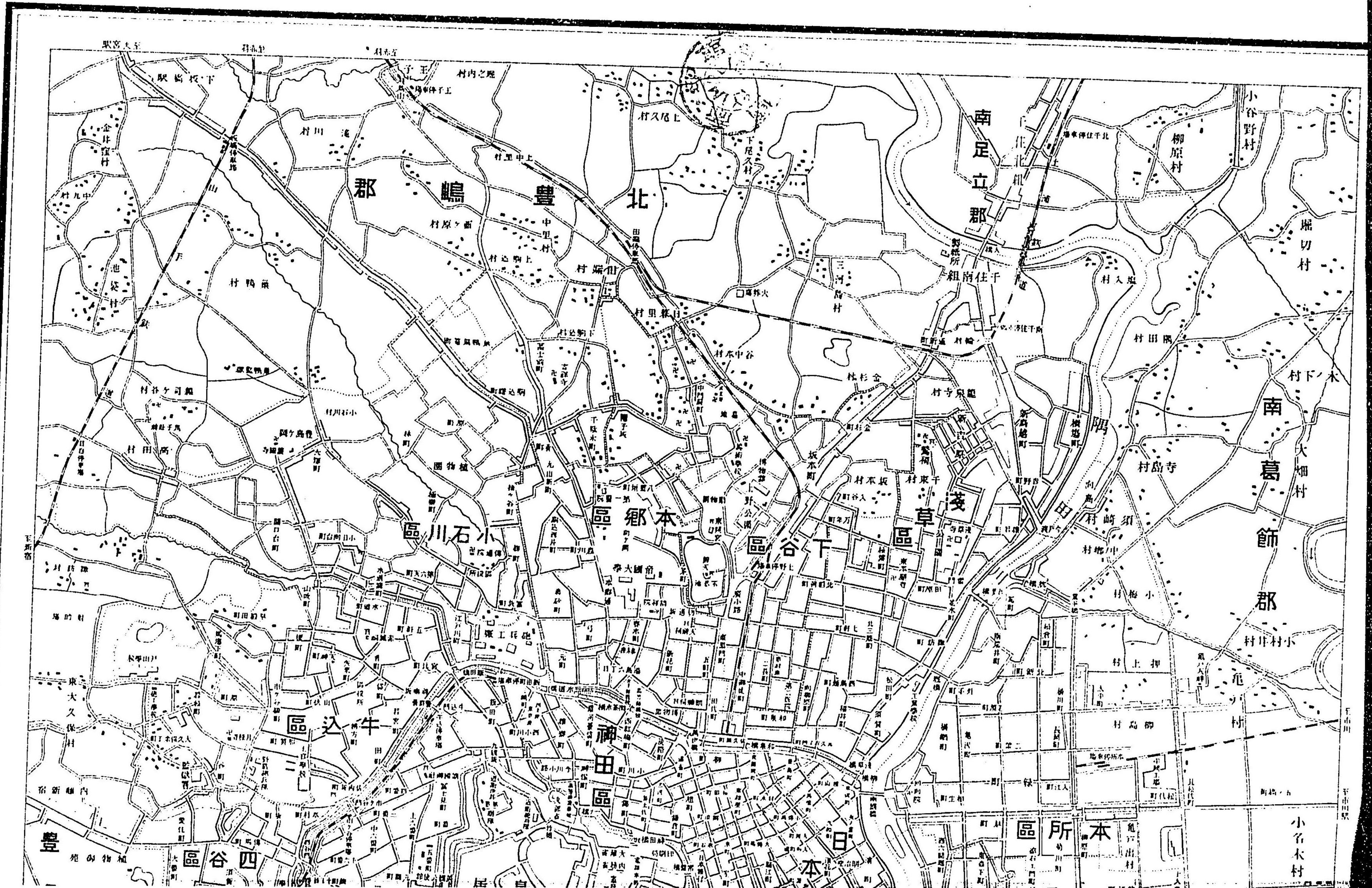
など、市中到る所として、「市は負けた」の呼聲を聞かざるはなし。

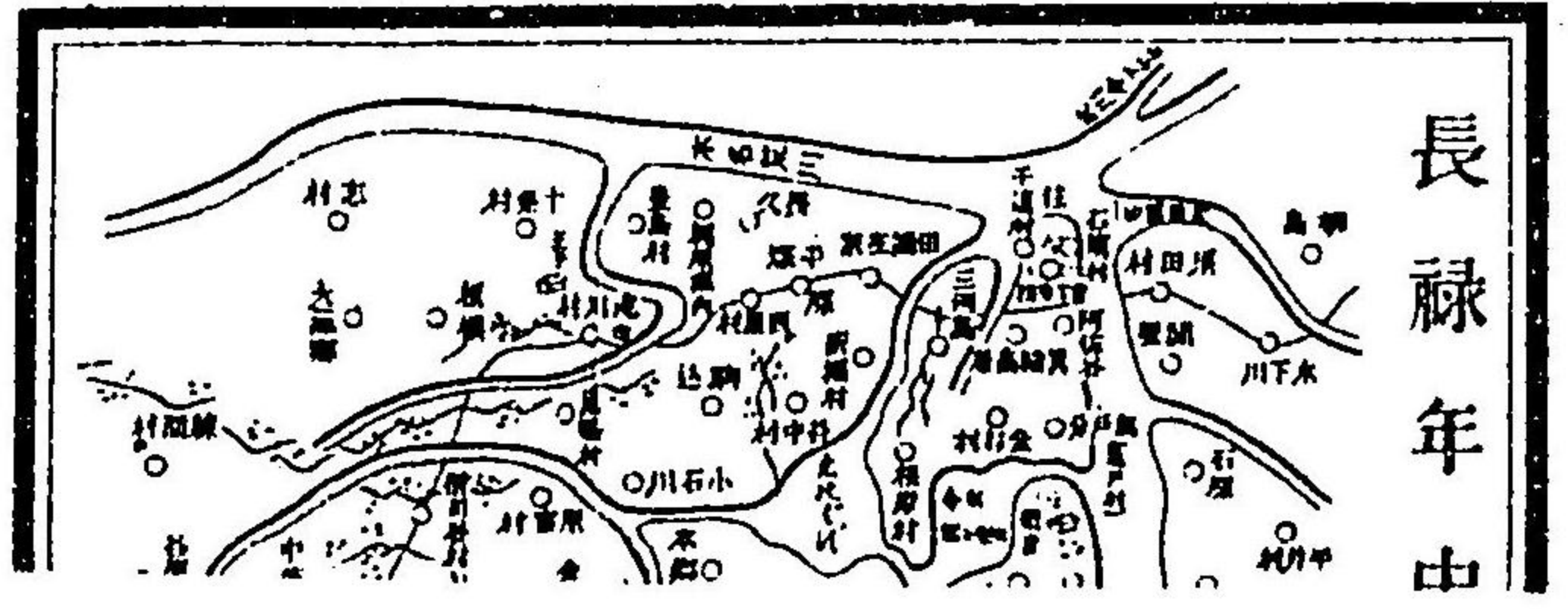
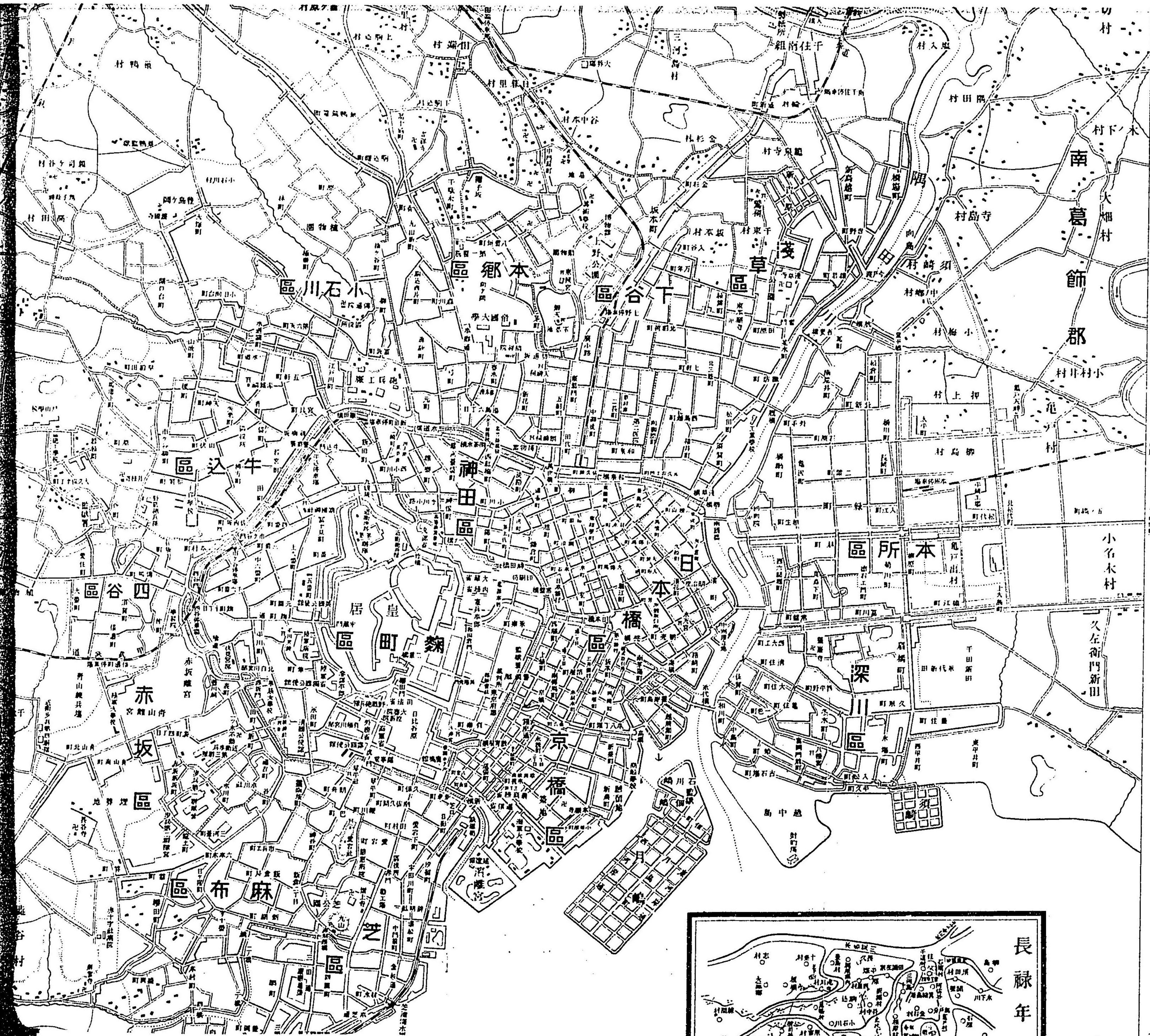


東京及其附近圖



東京及其附近圖

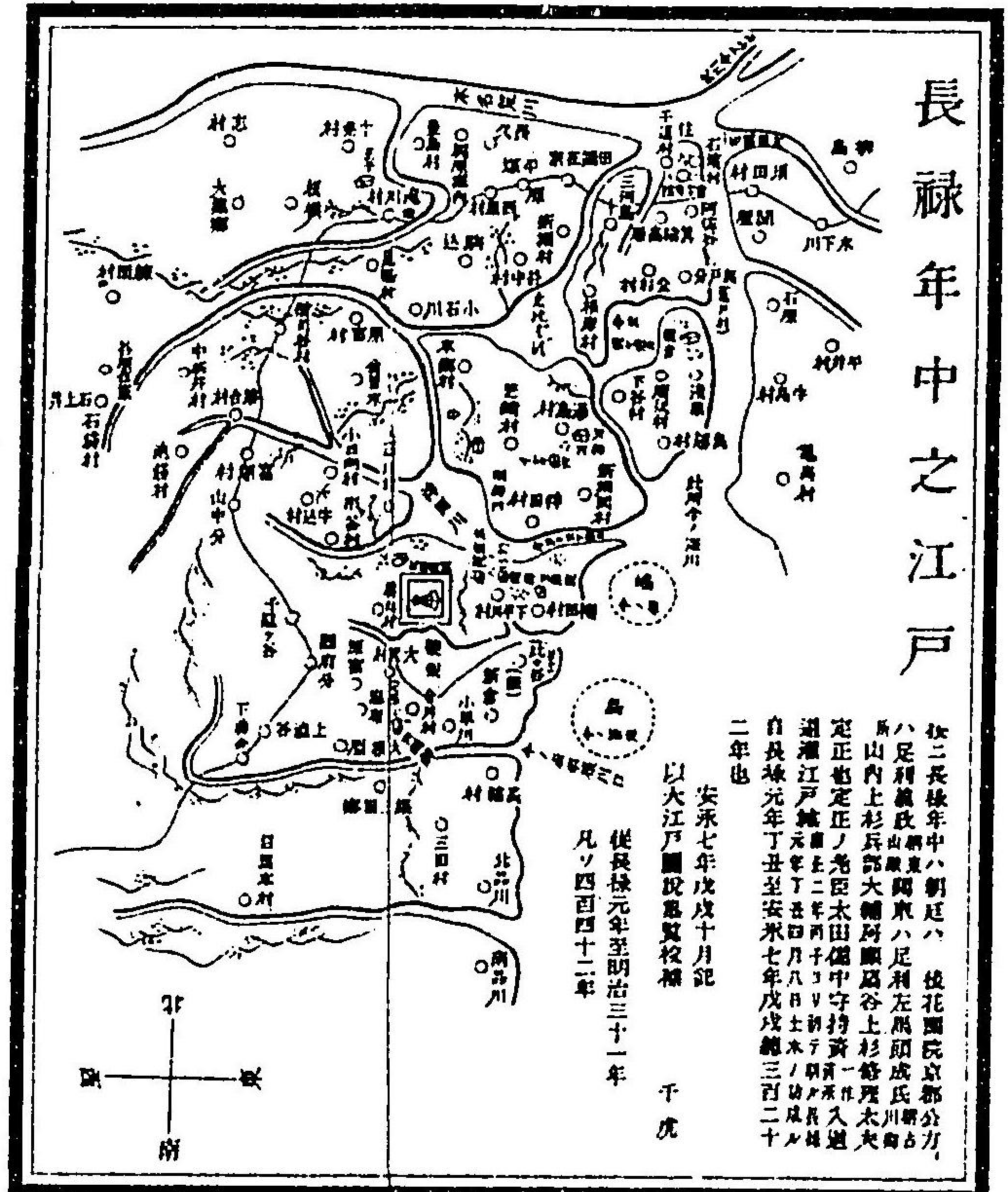
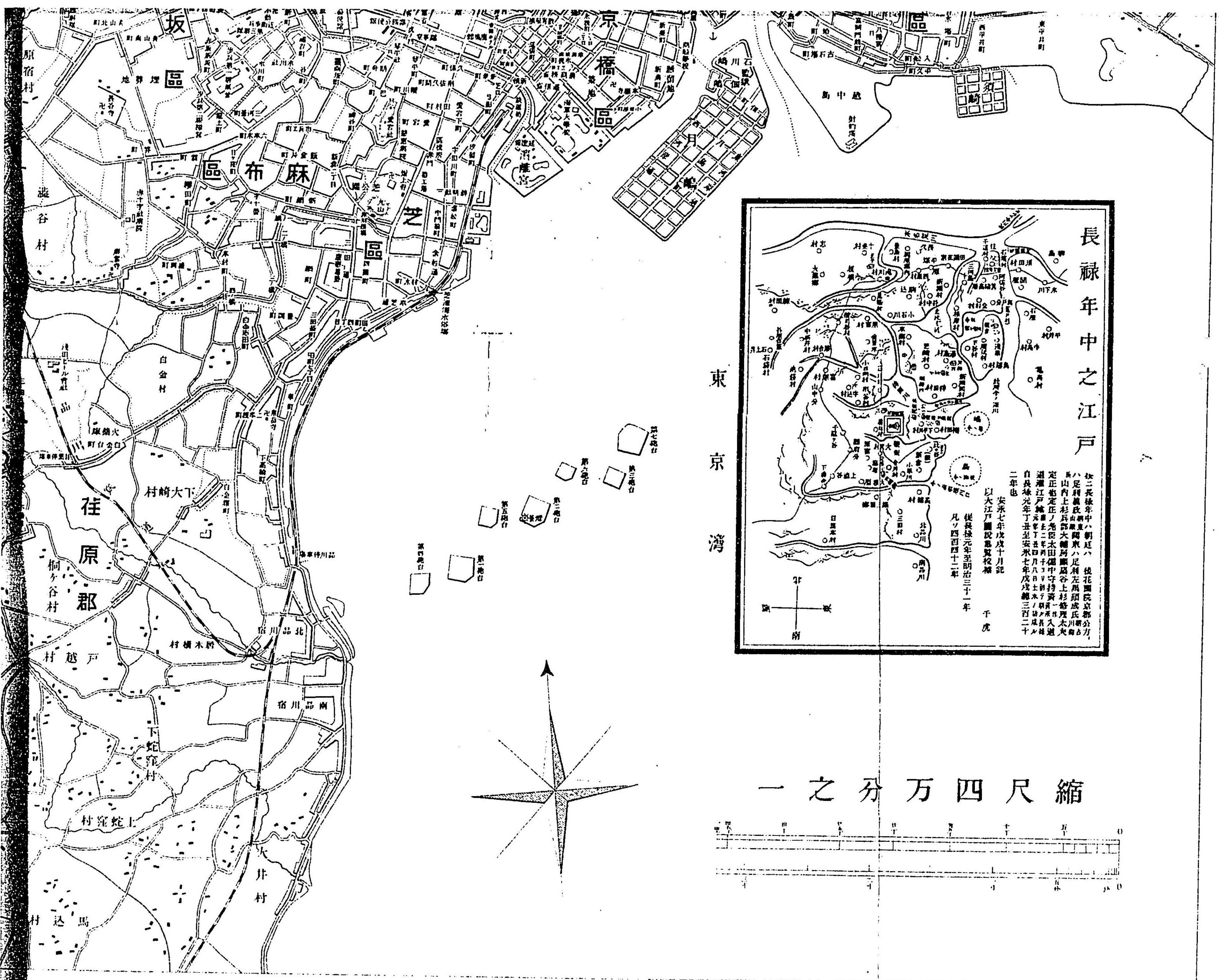




長祿年中



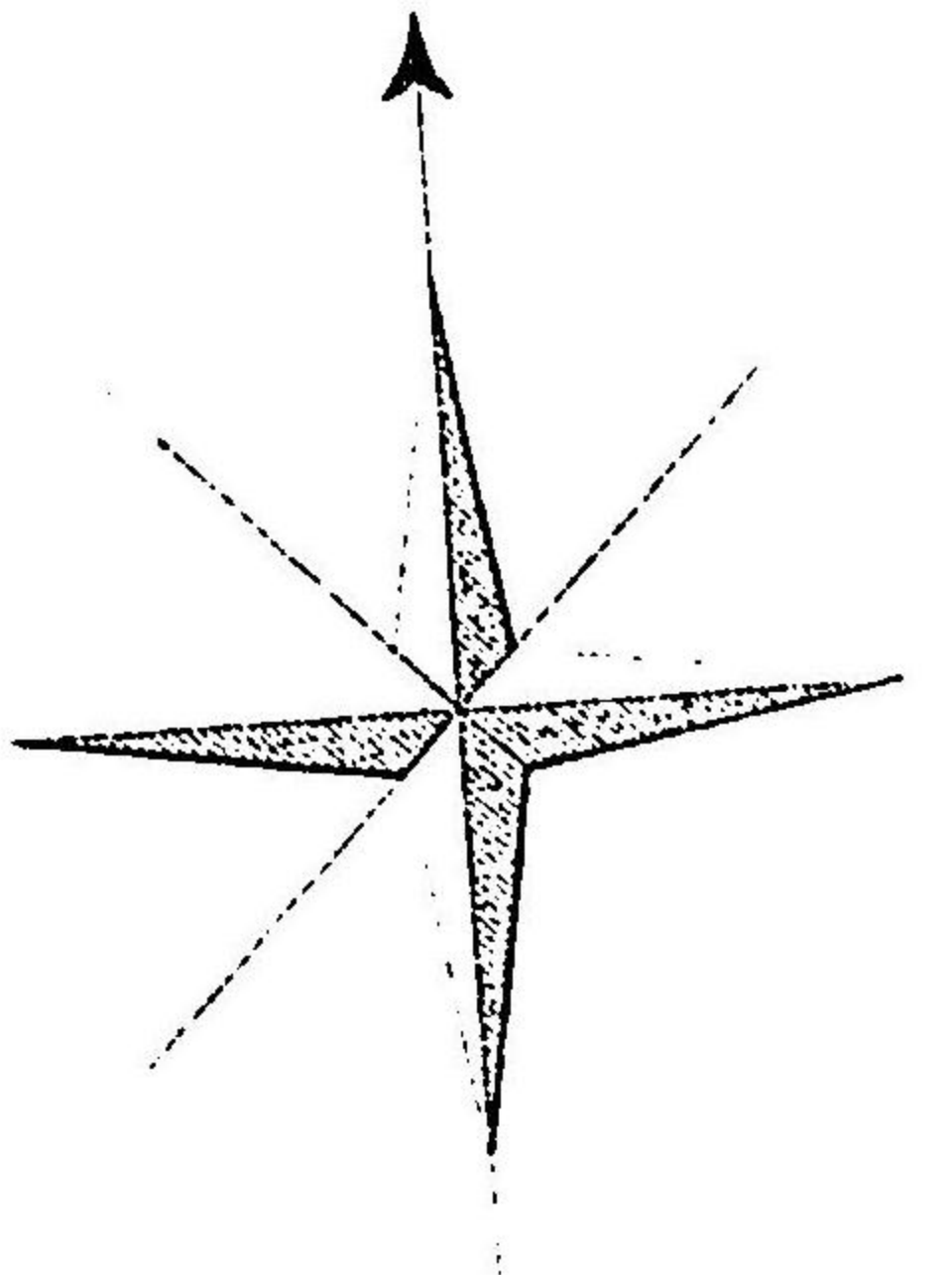
長祿年中



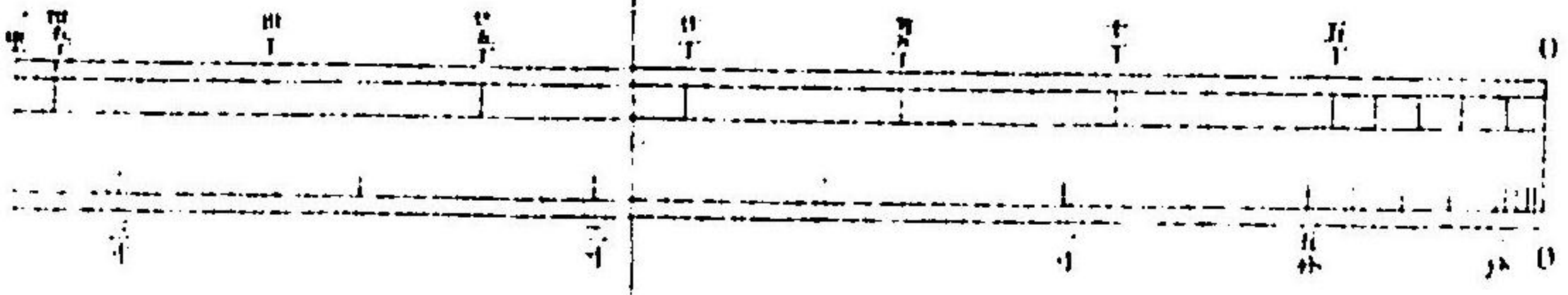
長祿年中之江戸

按三長祿年中八朝延ハ後花園院京師分方
 八足利義政改稱義隆八足利左馬頭成氏川崎
 所山内上杉氏大將房顯谷上杉管野大將
 定正也定正ノ弟大田田中守持資長久遠
 遠江江戶城元禄四年八月八日上杉氏
 自長祿元年丁丑至安永七年戊戌總三百二十
 二年也
 安永七年戊戌十月記
 以大江戶圖說覽覽校補 千虎
 從長祿元年明治三十一年
 凡ノ四百四十二年

東京湾



一之分万四尺縮



オールド紙巻 十本入
 フラグランド 二オンス入
 オールドリッパ 四オンス入
 オールド刻 二オンス入
 同 ゴールドライター 二オンス入
 米國賣會社東洋一手販賣全國至る處有之候御求めを願ひ升



天狗煙草 鷹號刻煙草

東洋第一の卷葉と刻葉なり
 天狗卷葉の偽造産悪品大に流
 行するは蓋し本商會の製品隆
 盛を表する者にして商會製造
 長好なるものに對しては反て
 萬々歳なれども御買求の節は
 岩谷松平製造に深く御注意願
 ひ上 升

職工一萬五千圓
 卷葉製造商會總本
 東洋煙草大王



東京銀座 岩谷商會
 大阪西橋堀 岩谷大阪支店
 東上橋南詰
 (電話本局二百二十七番地)

書肆春陽堂

東京市日本橋區通四丁目角 (電話本局五十一番)

弊堂出版の書籍は地理地文歴史理化學數學國文
歐文文典等の中學小學師範學校用教科書及傳記
類辭書類詩歌俳諧通俗なる醫書習字帖美術畫帖
並に小説及雜誌等とす而して是等の書籍を一覽
に便する爲め各種の書目を調製し無代價を以て
顧客に頒つ

弊堂は東京本店の外に一切支店は設置せざれ共
其出版の書籍は各府縣幾千の賣捌店及び朝鮮京
城仁川米國桑港獨國伯林等の各取次店に廻送し
あれば各人便宜に就て購求ありたし

弊堂への送金は内國通運便各銀行及江戸橋郵便
本局宛にて前金に限るべし

民事、商事、刑事、行政訴訟ノ
代理辯護鑑定等法律上万般
ノ依頼ニ應ス

法學士 辯護士 石橋友吉

東京市京橋區
北槇町拾六番地



● 行發日五月毎 ● 錢五十價實部一 ● 錢二稅郵

文壇の精華を煥き、宇宙の真美をうたふものを我新小説となす、新小説の編輯を主裁する者は石橋忍月氏にして、柳川春葉氏編輯の事を分擔して忍月氏を補け、幸田露伴氏これが顧問たり、前田曙山氏意匠に關するの事を司り、寺島閑哉氏劇苑を分擔す、濟々たる多士、我新小説をして九州大呂より重からしむ。

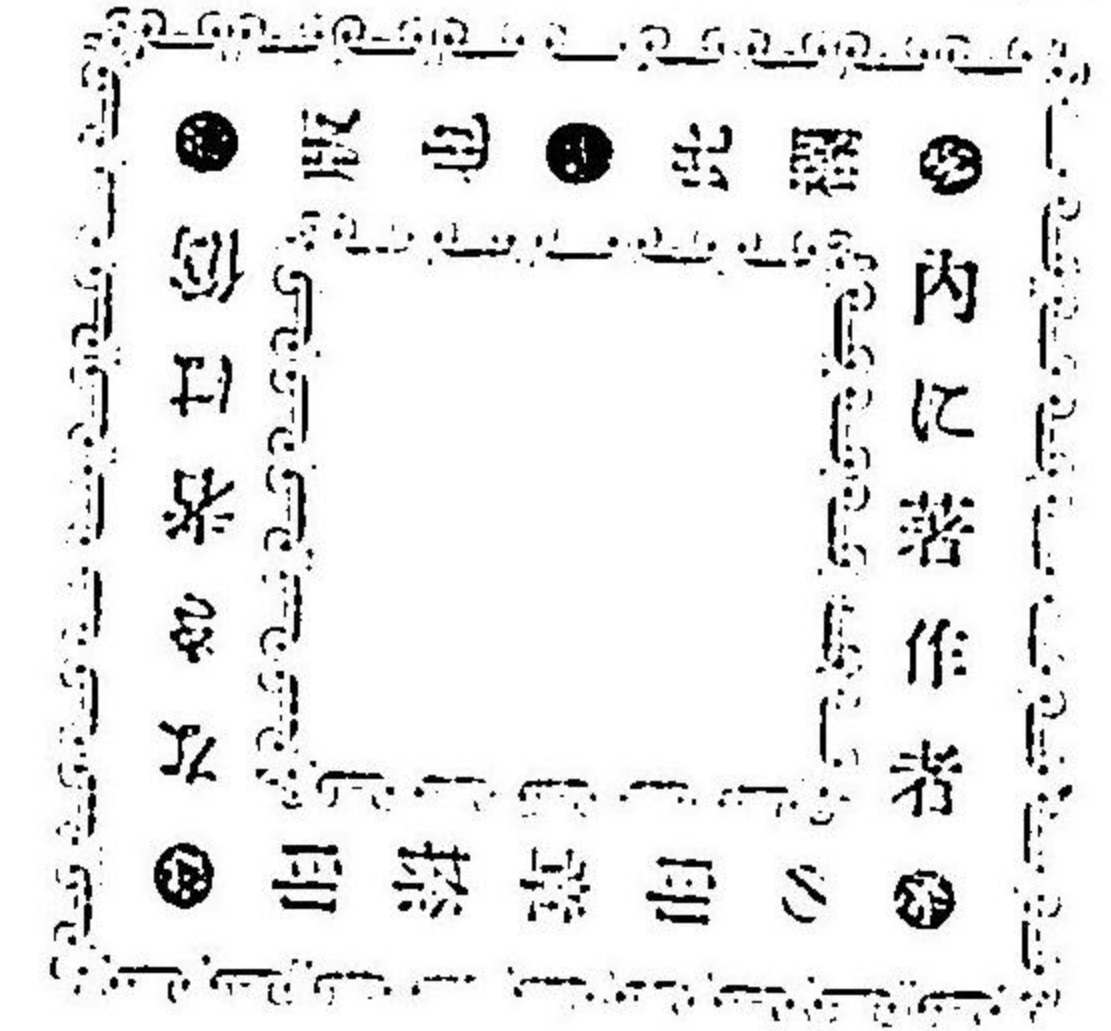
新小説には、小説雜錄評苑劇苑時報の五欄あり、挿畫は每號少くも二十餘葉に下らず、木版あり、寫真版あり、石版あり、コロタイプあり、實に錦上添花を添え、花下玉を布くが如し、加之每號賞をかけて詩歌俳句を募集し、以て大方の玉詠を募る。花より實あり、聊か以て文壇の花と稱し、雜誌界の大王と誇るに足らんか。

發行所 東京日本橋本町四丁目一番 春陽堂

明治三十一年五月十一日印刷
同 年五月十五日發行

東洋大都會興付
實價金四拾錢

版權所有



著者 石橋友吉
發行者 石橋友吉
東京市京橋區北橫町十六番地

印刷者 佐久間衡治
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

賣捌所 服部書店
東京市京橋區銀座三丁目

印刷所 株式會社秀英舎第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
(電話本局十九番)

明治三十一年五月十一日印刷
同 年五月十五日發行

東洋大會與付

實價金四拾錢

東京市京橋區北極町十六番地

發行者兼 石橋友吉

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

印刷者 佐久間衡治

東京市京橋區銀座二丁目

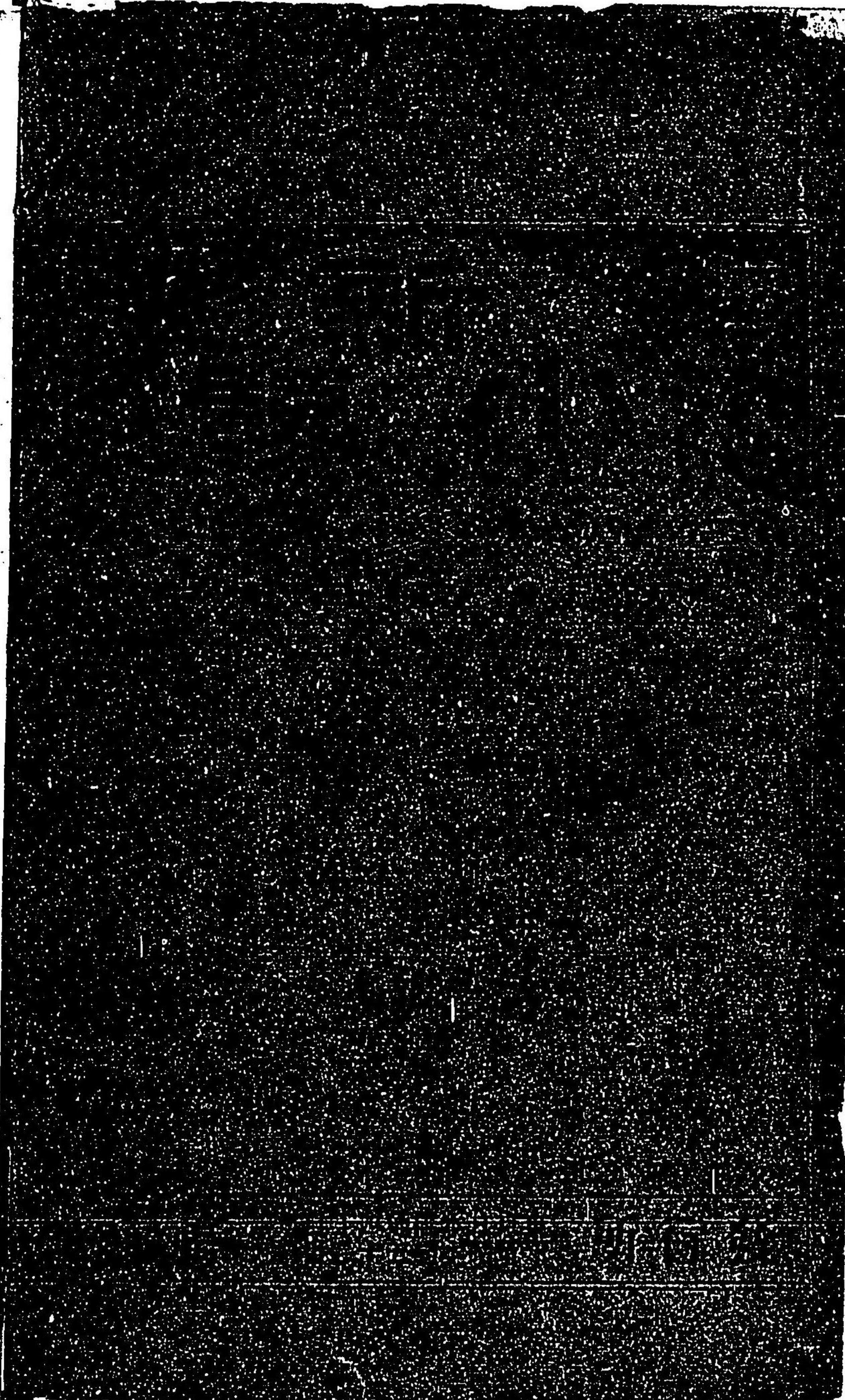
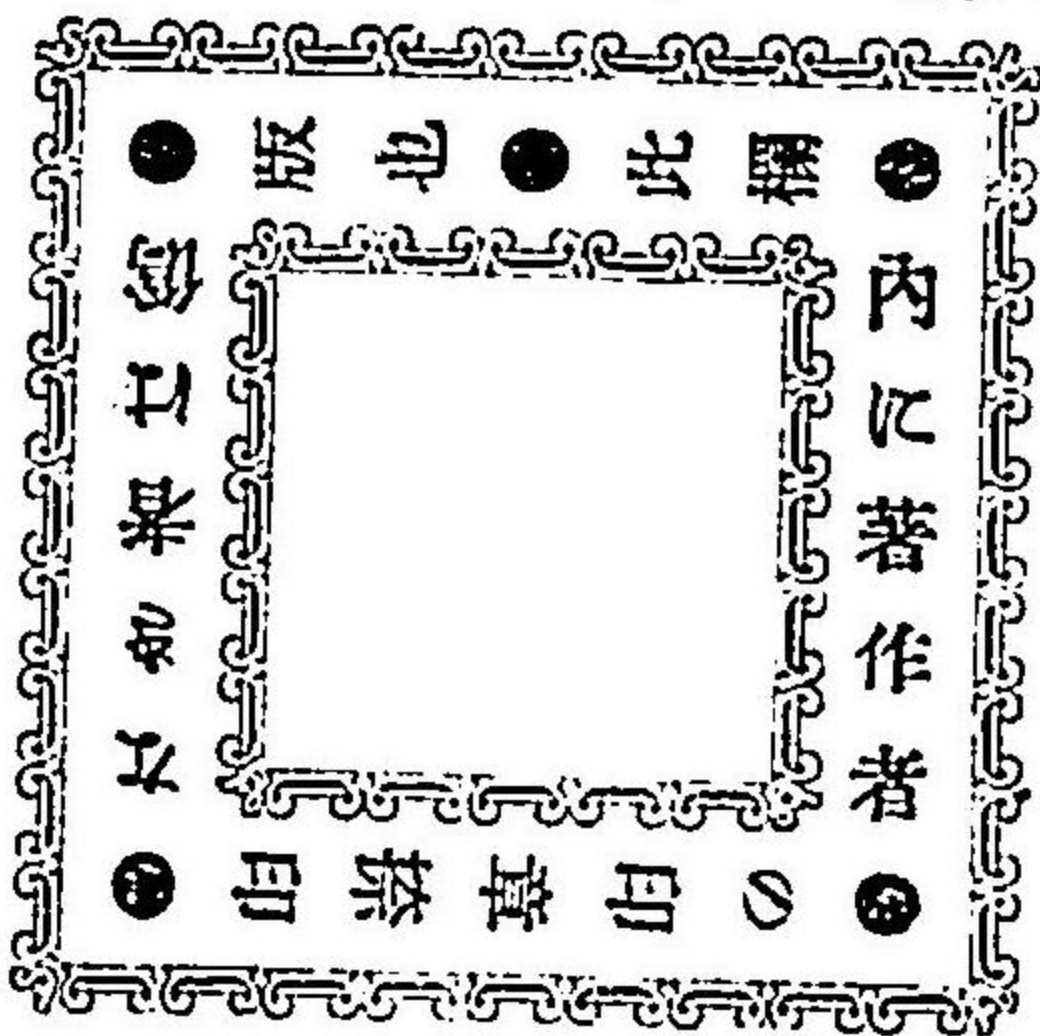
賣捌所 服部書店

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

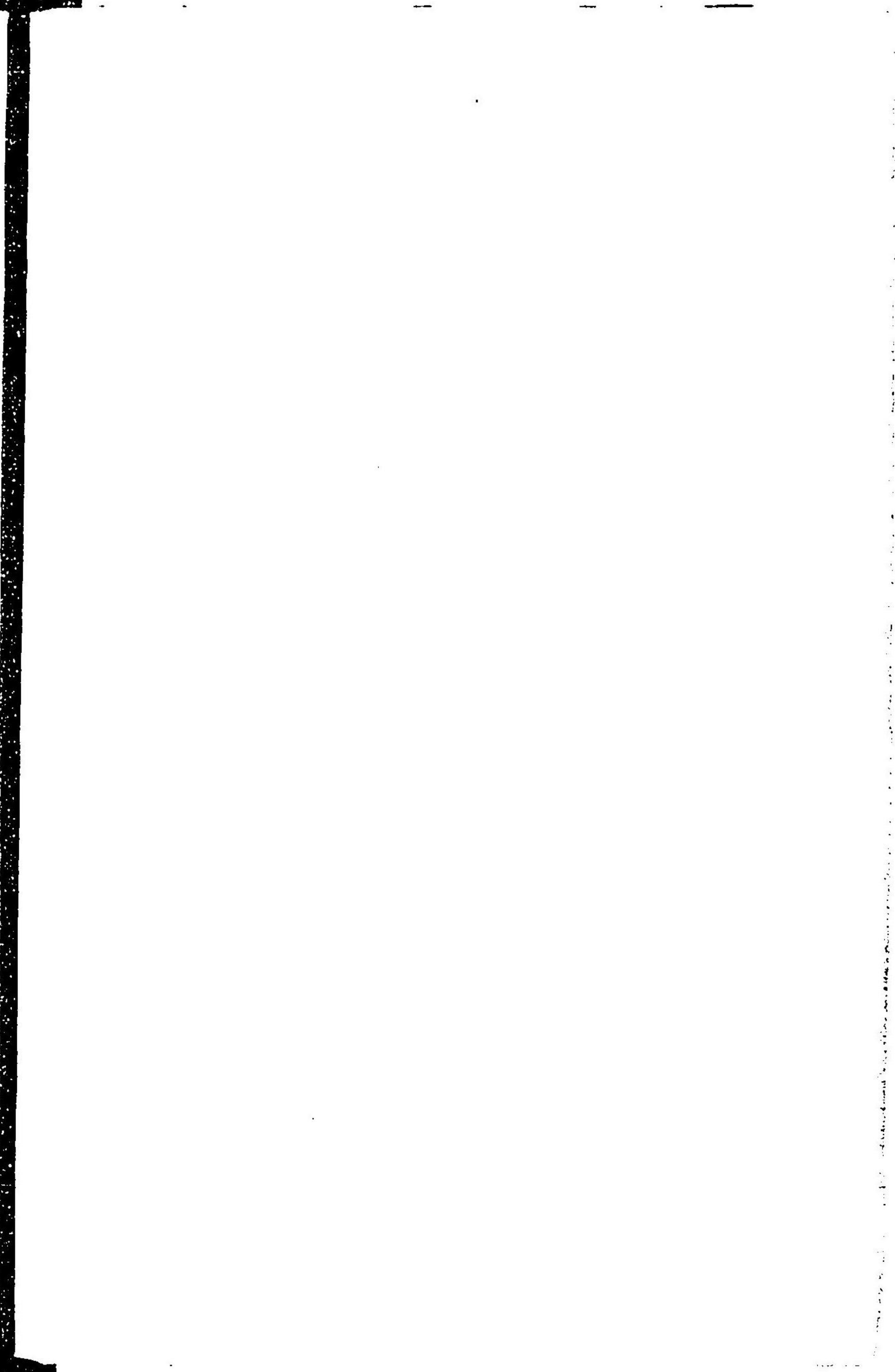
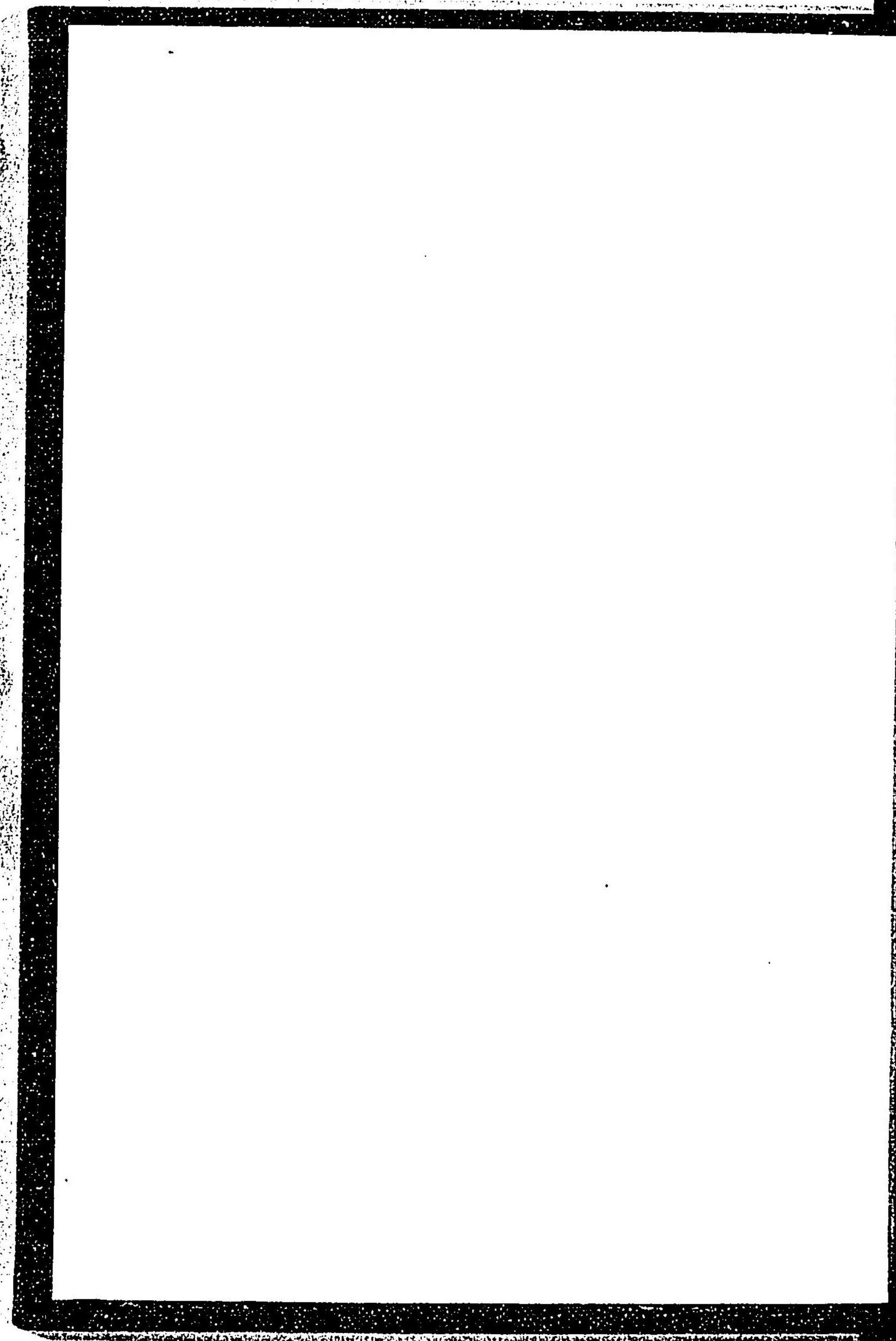
印刷所 株式會社 秀英舎第一工場

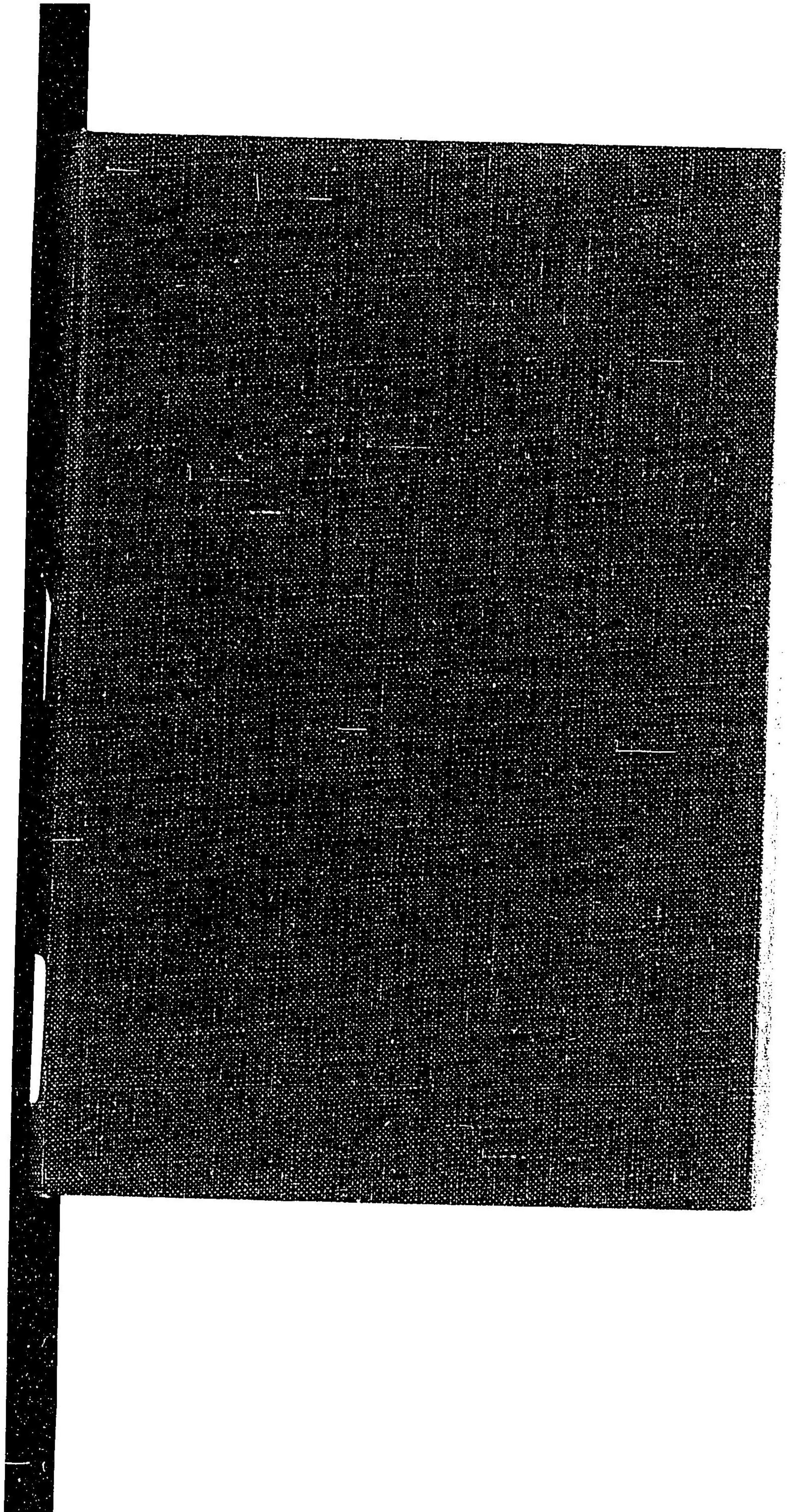
(電話本局十九番)

版權所有



216E-12





80

43

禁
複
写

024191-000-9

80-43

東洋大都会

前田 曙山(次郎) / 編

M3 1

ADC-1357

